Get the Dream

nora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｇｅｔ　ｔｈｅ　Ｄｒｅａｍ

【Ｎコード】

Ｎ１０９７Ｚ

【作者名】

ｎｏｒａ

【あらすじ】

この世には魂霊と呼ばれる化け物が存在する。そして魂霊を霊術を巧みに使い、退治する術師たち。膨大な霊力を持って生まれた、主人公　大谷真二を中心に様々な出来事が巻き起こる。

一話２０００字程度を目安に書いています。

第一話　痛すぎる朝

ジリリリリリ

目覚ましがなっている。現在時刻は６時。
俺は普段は早起きなのだ。そう、普段は・・・・

昨日の就寝時刻は夜中の三時だ。
にもかかわらず、目覚まし時計は容赦なく俺の耳を襲う。
目覚まし時計と眠気が俺の頭の中で激しい戦闘を繰り広げている。

２分間の戦いの果てに、眠気が勝利し、目覚まし時計は強制退場をさせられた。
・・・・俺の手によって。

■□■□■

私は、家の前の電柱である人物を待っていた。
「真二、おそいな・・・」

真二はいつも私より早く外で待っているくらい。
私よりも遅いことなんて無いはずなのに・・・
しょうがない。様子見にいって来よっかな。

私は徒歩１秒の幼馴染の家のピンポンを押した。
中からはお母さんが出てきた。

「あら、咲ちゃん。おはよう」

「おはようございます。真二、学校行きました？」
「真二、まだ起きてないのよ。悪いけど起こしてきてくれる？」
「あ、はい」
私は家に上がって真二の部屋に向かった。

■□■□■

気付いたら俺はよく分からないピンク色の空間にいた。
「あれ？ここはどこだ？」
キョロキョロと周りを見回していると前から水着姿のお姉さんが走ってきた。
え？あっちからも？こっちからも？
四方八方から水着のお姉さんが走ってきた。
・・・・・どういうことだ？俺はこれは夢か？・・・・・いやいやいや、俺はそんなに女に飢えちゃいないって。
そうこう考えているうちに、数人のお姉さんに抱きしめられている俺。
すっごく恥ずかしいっす。
きっと俺の顔はりんごのように赤く染まりきっているだろう。
数分で俺の思考回路はピンク色に染まりきってしまっていた。
「お姉さんの身体、気持ちいい～」
そう言った瞬間、俺の顔面に強い衝撃が走った。

■□■□■

私が真二の部屋に入り、今まさに彼を起こそうとした瞬間、彼はある一言をつぶやいた。

「お姉さんの身体、気持ちいい～」

かああ～～～～っと私の顔が赤くなっていくのが分かる。
それと同時に私の足が振り上げられる。
たるみきった彼の顔をロックオンする。

「何言ってんのよ、この変態！！」

私の叫びと共に振り上げられた足が勢いよく振り下ろされる。

「ぐえっ」

真二が呻き声をあげている。
次の瞬間、真二のお母さんが部屋に飛び込み、私と真二の間に入って

「咲ちゃん大丈夫！？
真二！！咲ちゃんに何したの！」
「なんもしてねえよ。俺は被害者だ」
「何言ってんの！咲ちゃん顔真っ赤じゃない。あとでゆっくり話を聞かせてもらうわよ」

そう言って私を連れて部屋から出て行く。
真二は一言

「俺って親から信用されてないのか？」

第二話　術者

自己紹介が遅れました。
俺は大谷真二（おおたにしんじ）北泉高校二年生。
さっき俺の顔面に踵卸を決めやがった奴は、桜井咲（さくらいさき）だ。一応俺と同い年で幼馴染だ。家も隣だから学校も同じだ。
小学生の頃から一緒に登校している。よく恋人だといわれるがそんな関係ではない。
ん～なんていうか、昔から近くにいすぎて、そういうのは意識したことが無い。
と、まあ自己紹介はこのぐらいにしておいて、俺は今登校中だ。

「どうしたの？ボーっとして」
「ああ、今読者のみんなに自己紹介をだな・・・・」
「読者？自己紹介？・・・・ねえ、真二、朝からなんか変だよ？」
「な、なんでもない（汗）」

そんな適当な話を交わしつつ徒歩十五分。俺たちが校門を通ると同時に俺たちは話しかけられた。

「やあ、おっはよー」
「おす、悠樹」
「おはよう、悠樹君」

こいつは俺の中学からの親友で相川悠樹（あいかわゆうき）だ。
身長は１６２ｃｍと小柄だが、めちゃくちゃ足が速い。俺も運動は出来るが足の速さだけはコイツに勝てない。

「ねえ聞いてよ悠樹君。真二ったら今日の朝ね」

「だーーーっ！！早まるな咲。それ以上は俺の個人の尊厳にかかわる！」
「ゴニョゴニョゴニョ・・・・」
咲は悠樹の耳元で小声で話している。ああ、終わった。これで一ヶ月はコイツにからかわれる。→クラスに広まる→俺の好感度が下がる→冷たい目で見られる
これは基本的人権の侵害だ！民事裁判を起こすしかない！
「どんな被害妄想をしているのか知らないが、大丈夫だって。誰にも言わないって」
悠樹は明らかに笑いをこらえている。・・・・だめだ。信用できねぇ
俺は一人沈みながら二人が教室に行くのをついていった。
「あれ、大谷どうした？なんかものすごく重い空気を放っているんだが・・・・」
「もう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだもう終わりだ」
「・・・・・・朝っぱらか何があったんだ・・・・」
と首をかしげるクラスメイトの男子一名。

■□■□■

授業が終わり、みんなそれぞれ帰っていく。悠樹はみんなに今朝の出来事を教えることは無く、俺の心配は杞憂に終わったようだ。
「真二、このあと一緒にゲーセンいかねえか？」

「ああー悪い悠樹。俺ちょっと用事があるんだ」
「そうか、そいつは残念だな。・・・・桜井、いかねえか？」
「私はちょっとそういうのは・・・」
「はあ、二人ともだめかぁ。しゃあねえ、今日はおとなしく帰るかな」

そういって悠樹は一人でとぼとぼと教室を出て行った。
ちょっと可哀想な気もするが、しょうがない。今回は一人で帰ってもらおう。

「さて俺らも帰るか」
「そうだね」

帰宅途中、俺たちはアイスを食べながら歩いていた。なにしろ今は7月の夏真っ只中だ。おそらく今の気温は３７℃だ。俺の体内温度計がそういっている。

ふと横を向くと咲がおいしそうにアイスをなめている。

ペロペロ、ペロペロ、ペロペロ

・・・・・異様に艶かしい気がするのは気のせいだろうか。ついつい見とれてしまう。
ダメだダメだ！咲はただアイスを食っているだけだ！煩悩退散煩悩退散！！

「どうしたの？真二。そんなに頭を振って」
「い、いやなんでもない・・・・」

なぜか沈黙が続く・・・うわ～、俺こういう空気は嫌いなんだよね。な、何か話さなければ・・・・・
俺が何を話そうかと悩んでいる時、ふと咲が言った。

「さっき言ってた用事って、また修行？」
「え？ああ、まあそうだな」
「・・・・そっか」
「それが、どうかしたのか？」
「ううん、なんでもないよ。ほら、もう着いたよ」

咲は笑顔で「じゃあ、また明日！」と言って家の中へと姿を消した。

■□■□■

私は自分の部屋の天井を見ていた。
私の幼馴染、大谷真二は代々術師としてその力を受け継いできた大谷家の末裔だ。真二の話によると、この世には魂霊（こんれい）と呼ばれる化物が数多く存在するらしい。真二たち、術師たちは魂霊の退治をしているらしい。
基本的に、魂霊は一般人の眼力でも見ることが出来るらしいが、ほぼ全ての魂霊が真夜中に人気の少ない場所で活動するため、一般人は滅多に見ることが無い。
十七年間真二の幼馴染をしてきた私でも一度しか見たことが無い。
真二は、毎日とまではいかないが頻繁にその身に秘めている力を使いこなす修行をしているのだとか。真二は修行のあと、よくあちこちに傷を作ってくるから相当厳しい修行であることは想像できる。

「真二、大丈夫かな・・・・」

私は真二が修行をするというたびに心配になる。できれば修行なんかしないで、みんなと同じように生活してほしい。でも、私達の知らないところで私達を守ってくれている真二にそんなことはいえない。

「・・・・・差し入れ、持っていってあげよう」

私はそう思ってとりあえず何を作ろうかと考えながら台所へ向かった。

■□■□■

俺は動きやすい服に着替えて、某猫型ロボット宅程度の広さの庭に出た。腰の辺りまである大きな石の前に立ち、両手の指を複雑に絡め付け印を結ぶ。

すると、石の前の空間が急に裂け始める。人が通れるくらいに穴が広がったところで俺はその中に入った。この穴は大谷家に代々受け継がれてきた秘密の修行場につながっている。

やがて、真っ暗だった視界が明るくなり俺はどこかの山の滝つぼの前に立っていた。

「さーてと、今日も始めるかな」

第三話　修行

異空間の中に存在する山。それは普段俺たちが住んでいる世界とは少し違う。この空間内では、自分の霊力が三分の一まで削られる。そうした極限状態での修行は常に自らの身体を危険にさらす。霊力が無くなれば異空間の中では存在できなくなり、その存在は二度と地上に戻ることは出来ない。――――つまり、死を意味する。

真二の足の周辺には風が小さな竜巻でも作っているかのように巻きつき、真二の身体を持ち上げる。そのままの状態で神経を手に集中させ、術式を組み立てる。

「炎の矢！」

真二の手から無数の炎の矢が放たれる。空中から放たれた矢は木々に突き刺さり、轟と音を立てて燃え上がる。自分でつけた火は自分で消さなければならない。勝手に消えてはくれないのだ。続けざまに幾重にも複雑に術式を組み立て、一つの術式として発動する。

「豪雨」

雲ひとつなかった空に巨大な術式が組み立てられ、水とは思えない切れ味を持った雨がバケツをひっくり返したかのように降り注ぐ。それまで燃えていた木々を切り倒し、地面に鋭い傷跡を残して、あっという間に炎は消火される。

「はあ、はあ、はあ、つ、疲れた～」

俺は地上に降りてちょうどいい大きさの椅子に腰をおろした。

さすがに少し休憩しないと本気で死にかねない。

しばらく休憩していると、目の前の空間が裂けだした。
ここに入ることが出来るのは大谷家の者しか入ることが出来ないはずだ。だとすると・・・・・

「おお、真二やってるか」
「やっぱり親父か」

俺の親父は年齢の割りに霊力は持っていない。それに対して、俺の霊力は桁外れに多い。
それでも、親父には何十年間も術師としてこの地区一帯の魂霊を倒してきただけに経験値は俺なんかの比ではない。

「ちょっと、俺と一緒に決闘でもしないか？」
「お、親父と？俺さっき大技使ってかなり霊力すり減らしてんだけど・・・・」
「大丈夫だって。お前はとんでもねぇ霊力持ってんだ。ちょっと使ったくれぇじゃ死にゃしねぇよ」
「分かったよ、そんじゃ少しやろうぜ」
「まだまだ、お前には負けねぇぞ」
「お手柔らかに頼むぜ、親父」

お互いに戦う準備を整え向かい合う。

「行くぜ、親父！！」

■□■□■

私は五分ほど悩んだ末、クッキーを焼くことにした。

エプロンをつけ、料理の準備をする。今日はお母さんもお父さんも仕事で遅くなるらしいから夕飯の準備も一緒に進める。
とりあえず生地を作り寝かしておく。今回は少し砂糖を多めにしてみた。その間に夕飯のおかずを一品仕上げる。
そのあともテキパキと仕事を進め、午後の六時半、私に課せられたミッションは全てクリアした。後は真二に届けるだけだ。

「真二、喜んでくれるかな？　ふふ」

真二がクッキーを頬張るところを想像するとなぜか笑いがこみ上げてきた。

■□■□■

俺は親父との戦闘で悪戦苦闘していた。

「ほら真二、どうした？その程度か？」
「まだまだ～！！」

足に意識を集中し術式を組み立てる。

「音速移動」

風に乗り、瞬間的に音速まで加速する。一気に親父の背後に回りこみ、風に乗せた拳を繰り出す。

「水膜」

突如として現れた水の膜によって防がれる。が、それは予想の範囲内。そのまま音速移動を続け、親父に突っ込む。と、同時に両手に

あらかじめ組み立てておいた術式を展開し、炎の花を咲かせる。

「炎華！」

俺の両手からは燃え盛る炎が噴き出し、まるで大輪の花が手から咲いているのかのようだ。

超至近距離からの炎華は避けられねえだろ！

あたると思った。いや、あたる筈だった。しかし、親父は俺の上を行く動きを見せた

「光速移動」

音速で動く俺に対して光速で動く親父。

敵うはずもなかった。

「荒れ狂う風」

さっきとは逆に後ろに回りこまれ、強い風が刃を持って襲い掛かってきた。

なんとか、防御系術式を展開して致命傷を避けたが５０メートルくらい吹き飛ばされた。もう戦えるだけの余力は俺には無かった。

「お、親父、降参だ」

「なんだ、もう終わりか？俺まだ一撃もくらってないぞ？」

「うるせ～あっれでも俺本気だったんだよ！（泣）」

■□■□■

真二の家に行って見たら、庭に真二がぶっ倒れていた。その横でニ

カニカと笑っているお父さん。
え？どう状況？

「お、咲ちゃん。真二と夜のお付き合いでもしに来たのか？」
「ち、違いますよ！！変なこと言わないでください！」

きっと私の顔は真っ赤だろう。まったく、この人たちはやっぱり親子だ。

「悪い悪い。で、どうしたんだ？」
「あ、えっとですね、今日修行があるとか言っていたんで、差し入れにと思ってクッキーを焼いてきたんですけど・・・・」
「へえ～～。そうか、ありがとうね咲ちゃん。ほれ真二、咲ちゃんから差し入れだぞ！」

そう言って倒れている真二の顔にクッキーを近づけるお父さん。
そして、においでも嗅ぎつけたのかビクンッ！と反応して袋ごとかぶりつく真二。
・・・・・・犬？
私がクッキーを取り上げると、顔をしかめる真二。

「・・・・・おすわり」

少しの間戸惑って正座する真二。

「お手」
「・・・・・なめてるだろお前」
「ごめんごめん」

私は、クッキーを真二に差し出した。

真二は袋をあけ、クッキーを頬張り始めた。
一度に三枚のクッキーを口に入れると言うかなり見た目が悪い食べ方をしている。相当腹が減っていたんだろう。
その時、もぐもぐと口を動かし始めた真二に異変が起きた。
「ブヘッ。こ、このクッキーしょっぺぇ～」
口に入れたクッキーを吐き出して訴える真二。
「う、嘘!?も、もしかして砂糖と塩間違えたかな!だ、大丈夫?」
しかも今回は砂糖を通常比1．5倍で入れたつもりだから相当しょっぱいだろう。
「さ、咲・・・・・いつからお前はそんなドジっ子になったんだ?」
顔をしかめながら、私に問いかけてくる。
そんなこと聞かれたって困るよ～。
また私の顔は真っ赤だと思う。本当に今日は恥ずかしいことばかりだ。

第四話　たまには感謝も

ミーン、ミーン、ミーン

「もう少しで夏休みだなぁ」

「ああ、そうだな」

「休み中、何しようか」

「・・・・・魂霊狩り」

「は？」

夏休みまであと二日。俺と悠樹は真昼間の学校の屋上で寝転がっていた。

え？授業？・・・・・そんなもん知らん

「おいおい、いくらなんでも結婚式の邪魔しちゃ駄目だろ」

「えーっと、け、結婚式？な、なんでだ？」

自分の発言に気付き、どもりながら聞き返す俺。

「なんでって、お前が婚礼狩りなんて言うからだろう」

「あ、婚礼ね」

キーンコーンカーンコーン

やがて、終業のチャイムが鳴り、屋上のドアがスパァンと勢いよく開かれる。

「大谷真二！相川悠樹！やっぱりここにいた。何授業サボってんのよ！！」

「なんかうるさいのが来たぞ。どうする？」

「どうするったって・・・・・逃げるしかないっしょ！」

俺たちは立ち上がり、もう一つの屋上の端にあるドアに全力疾走で走る。

「ちょ、待て！！」

階段を駆け下り廊下を走る。後ろから聞こえる声はすぐに聞こえなくなった。なんたって足の速さは学年の2トップの二人だ。

因みにさっきの声の持ち主は風紀委員長の霧島早百合（きりしまさゆり）だ。同学年と言うだけでなく、クラスまで同じなのだ。

髪はちょっと長めで整った顔立ちをしている。個人的には結構可愛いと思う。

「そろそろ逃げ切れたかな？」

「ああ、そうだな。もう大丈夫だろ」

スピードを徐々に落としていき、曲がり角を曲がった瞬間、彼女はいた。

「もう逃がさないわよ」

「ぐっ、待ち伏せか！どうする真二」

「しょうがねえ、強行突破だ！突っ込むぞ悠樹！！」

「おう！」

俺たちは一気に加速し、廊下に腕組みをしながら立つ彼女に突っ込んだ。

「ええぇ！？待って待って！！」

これにはさすがに驚いたのか手を振り回しながらあたふたしている。
その瞬間を見逃さず、彼女にぶつかる直前に俺たちは二手に分かれ、一気に駆け抜ける。
無事突破成功だ。

「あとで覚えてなさいよぉぉぉぉぉ！！！」

後で怒鳴り声が聞こえるが無視だ無視。
案なのにいちいち付き合ってられない。

■□■□■

ようやく学校が終わり、放課後になった。
いつもの三人で教室を出ようとした瞬間、

「そこの二人。ちょっと待ちなさい」
「な、なんでしょうか」
「俺たち早く帰りたいんだけど」
「あんた達にはまだ罰が残ってるよ！！」

・・・・やっぱりか～

「勝手に授業をサボって！風紀委員長として罰を課すわ！これからこの教室を掃除してから帰りなさい！！」
「え～っと、頑張ってね！二人とも」

「さ、咲！お前は俺たちの味方じゃないのか！？」
「だって二人だけ授業受けてないはズルいし～」
「「そんな～」」

咲がそっち側につくとは・・・・・予想外だ。
それからせっせと掃除をする俺たち。咲が待っている所為もあって早く終わらそうと必死である。
はあ～、一年のときはこんなこと無かったのになぁ～
今年から風紀委員長になった霧島のせいだ。

15分後

「「終わった～」」
「二人ともおつかれさま～」
「それにしても、咲もよくこんな奴等待ってるねぇ。先に帰っちゃえばいいのに」
「それはさすがに可哀想かな～って思って」
「あんた達幸せね～こんな優しい女の子と一緒にいられて」
「まあ・・・そうかもしれないな。感謝してるぜ、咲」
「俺もだよ、咲ちゃん」
「て、照れるよ二人とも～」

おっ！咲の顔が真っ赤になってる。
これは・・・やばい可愛すぎる。俺の脳内メモリに保存しておかなければ。
これは健全な男子としての義務だ！

「ほら、二人とも帰ろっ」

「そうだな、じゃあな霧島」
「もう授業サボんないようにね！」
「あいよ～」
教室を出た俺たちはいつもどおり三人でたわいのない話をしながら家に帰ったのだった。

■□■□■

翌朝

「母さん、話って何？」
「私とお父さんね、明日から沖縄に旅行に行くことにしたの」
へ～・・・・・って明日！？
飲んでいたお茶を吐き出すのを何とかこらえる。よくがんばった、俺。

「あ、明日って急すぎるだろ！」
「それがね～術師の会合とかでお父さんが九州の方へ行くのよ。そのついでに沖縄観光に行こうってことに鳴ったのよ」
「それで？」
「真二には咲ちゃんのところに泊まってもらおうことにしてもらったわ」
「はい！？飯だけ一緒に食えばいいじゃん！何も泊まらなくｔ・・・」
「うん、泊まってね」

「最後までいわせんかい！」
「咲ちゃんのご両親がその日たまたま出張でね、家にしばらく帰れないんですって」

はい、スルーですね。
てか、なんでみんなして家を空けるんだよ！

「で、でも別に泊まることないだろ」
「女の子一人家に置くのは危ないじゃない」

それはそうかもしれんが・・・・・
だいたい、咲は了解してんのか？

「そ、それで咲は良いって言ってんのか？」
「それは問題ないらしいわよ。

マジか。咲の奴、何考えてやがる。
「あ、もし咲ちゃんに手出したらどうなるか・・・・・覚えておきなさい」
「な、なんもしねーって！」

お袋の笑顔が怖い。なんか背中から負のオーラが出てる気がするのは気のせいだろうか。いや、気のせいではあるまい。（反語）

しかし、えらいことになったぞ・・・・
もしも・・・もしものことがあれば、俺は肉体的にも社会的にも死んでしまうかもしれん。
俺の理性よ。頼むから本能に負けないでくれよ！・・・・

第五話　目覚めの時

「えーっと、もう一回いってくれる？」
「だから、しばらく私たち家を空けることになっちゃったから、お母さんたちが帰ってくるまで真二君と一緒に住んでね」

えええぇぇぇぇぇぇ！！！！
真二と一緒に住む！？この家で？む、無理だって！
だってそれだと料理は全部私が作るって事だよね。真二に料理なんかできるわけがないし。
でも、この間クッキー失敗しちゃったし・・・・うぅぅ～。

「無理だよ、お母さん。だいたいご飯は私が作るとして、寝るところは？」
「私たちの部屋で寝てもらえばいいでしょ」
「テレビは？」
「仲良く見なさい」
「お風呂は？」
「交代で入ればいいでしょ」
「・・・・・・わかった」

どうやらこれは避けられないことのようだ。
質問の内容がおかしい気もするが気にしない気にしない。
真二がうちに泊まるなんて何年ぶりだろ？
もう、7，8年はたつんじゃないかな。

「それにね、咲が一人で家にいるっていうのは親として不安なの。真二君の家もご両親がちょうどいないみたいだし、しっかり守ってもらいなさい」

「はーい」

真二に守ってもらう・・・・か。
何年前だろ。私が小学三年生のときだから・・・・八年前かな。
あのときも真二に守ってもらったっけ。

■□■□■

八年前

「ねえねえ、咲ちゃん。お父さんが遊園地に連れてってくれるんだって！一緒に行こうよ」
「遊園地？うん！行く！」
「それでね、お泊りするんだって」
「そうなの？待って、お母さんにいいか聞いてくるね」

私は真二に遊園地に一泊二日で行こうと誘われた。
お母さんに必死にお願いして、許可をもらった私は真二のお父さんの車に乗った。

その日、真二と一緒に遊園地でめいいっぱい遊んだ私は旅館に泊まった。
その夜、私はトイレに行きたくなり、真二を連れて行った。
その旅館は古く、トイレが外にあったのだ。とまっているのは私たちだけだった。
まだ小3だった私は暗闇の中を歩いていく勇気はなく、真二を連れ

ていったのだ。

「真二、起きて」
「んん～？何、咲ちゃん」
「トイレに行きたいの」
「トイレ？一人で行ってきなよ」

当然、真二は嫌がっていたが・・・

「だってこの旅館、トイレは外にあるんだもん」
「え？そうなの？」

今なら思う。真二は遊園地から戻ってからトイレに一回も行ってないのだ。
ある意味すごいと思う。

「・・・わかったよ。さっさと行ってこよう」

そうして私たちはトイレに向かった。
私はさっさと用をたし、部屋に戻ろうとしたとき、私たちの前にそれはいた。
自分の三倍はあるんじゃないかという大きさの全身黒い毛に覆われた肉体。
その鋭い目は赤く光り、私たちを射抜いていた。

「あっああっ・・・な、なに！？・・・っばっばけ・・もの」

私は怖くて恐ろしくて目の前の巨大な化け物を前にして、うまく口が回らずそこにぺたりと座り込んでしまった。
視界がだんだんぼやけてくる。涙が溢れ出し、座って震えているだ

けだった。
その化け物は私を体に見合った巨大な手でつかみあげた。
そのとき、私と同じように震えていた真二が立ち上がり、叫んだ。
「咲ちゃんを離せえええぇぇぇっぇぇぇ！！！」
真二の顔を見たとき私は驚いた。なぜなら、完全に真二はキレていた。九歳という幼さであるにもかかわらず、その表情はまさに鬼の形相だった。
その次の瞬間、真二の立っている地面が青白く輝きだしたかと思うと真二の周りに風が吹き荒れ、両手からは炎が噴き出していた。
私、呆然。
「うおおおおお！！！！」
そう叫んだかと思うと瞬間的に私をつかんでいる腕に飛び乗り炎の拳を繰り出した。
きっと相当痛かったのだろう。化け物は私を離し、殴られたところをもう片方の手で押さえながら
「□＃△％％□――――」
と、人ならざる叫び声をあげた。
真二は落下する私をキャッチし、地面にそっと降ろして化け物に飛び掛る。
真二はよりいっそう激しさを増した炎を拳に纏い、化け物に目にも留まらぬ速さで連打を繰り出していく。

その直後に鋭い刃となったいくつもの風が化け物を襲う。化け物の体は切り離されたところから、真二の燃える拳によって燃やし尽くされていく。やがて化け物は跡形もなく消滅した。
一方真二は着地したと同時に彼を包んでいた風も炎も消え、急にその場に倒れた。

「し、真二！？真二！！」

私が真二を起こそうと体を揺さぶっているとすぐに真二のお父さんが来て、とりあえず寝なさいといって真二を抱きかかえ、部屋に戻っていった。私はそのすぐ後ろをついていくだけ。
部屋に戻っても眠れるわけがないと思いつつも、まだまだ幼い私はいつのまにか寝てしまっていた。
翌朝、真二は一応目を覚ましたものの、すごい熱だった。その日はそのまま帰宅。
魂霊のことや術師の事を聞いたのはそれから2，3日後のことだった。

なんでも、真二は今まで術師のことは一切知らされていなかったのだとか。それで初めてなのにもかかわらず、膨大な霊力を無意識のうちに使い、その反動で熱をだしただけだと説明された。
後、このことは誰にも言ってはならない。とも言われた。
だから、うちの親は二人とも真二の力のことは何も知らない。

■□■□■

夏休みの前日、俺は荷物をまとめて咲の家に行った。部屋に入るのは久しぶりだ。
さてと、俺に割り当てられた部屋はもともと空き部屋だったところだった。そこに俺は自分の布団を持っていって寝るのだ。

なぜ咲の両親の部屋に寝ないのかって？そりゃ俺も初めはそのつもりだったよ。ベッドもあるし、テレビもあるし、快適な部屋だとは思う。
でもさ、なんか、下着とかネクタイとか結構散らかってたりしていまして。さすがにそんな部屋に住もうとは思えねえ。
・・・・おばさん、せめて下着だけは片付けていこうよ。

一通り荷物を片付け終わったとき台所のほうから声がした。

「真二～、晩御飯できたよ～」
「おっと、もうそんな時間か」

時計を見てみると現在時刻１９時。

「あいよ～」

先にそう返答し、台所へ向かう。
ところで、あいつの料理大丈夫かな？俺は甘ったるい味噌汁とかは御免だぞ？

第六話　対キマイラ

俺は今、食器を洗っている。

ゴシゴシ
ジャー
フキフキ
ガチャ

上から効果音の説明をすると、
スポンジで皿を擦る音
泡を洗い流す音
皿をふく音
皿を重ねる音　だ。

「真二～、終わった？」
「ああ、今終了したところだ」
「それじゃあ私は部屋にいるね」

そういった咲は自室へと戻っていった。

廊下でドン！という物音と共に「いててててて・・・」という声が聞こえるが、スルーだ。
本格的にドジっ子への道を歩んでる奴を、俺は止めはしない。
なんでかって？可愛いからに決まってるだろっ！

俺も自室（借り物）に戻りベッドに布団に横になる。魂霊との戦闘に備えて仮眠を取っておかなければ身が持たない。
ただ、最近は出現してないから寝過ぎな感じもするけど。

やがて、俺は睡魔に襲われて意識を手放した。

「ん～・・・・今、何時だ？」

仮眠にしては深い眠りから覚めた俺は携帯で時間を確認する。現在時刻１２時１５分。寝たのが確か９時過ぎだったから三時間ほど寝ていたことになる。

とりあえず、のどが渇いたので俺は台所に水でも飲みにいくことにした。

台所に入ろうとしたら、ちょうど咲が出てくるところだった。ピンク色の生地に小さなクマのイラストがプリントされているパジャマを着ている。

・・・・可愛い

「あ、真二どうしたの？」

「え、あ、えーっと、ちょっと水でも飲もうと思って」

ついつい見ほれてしまっていた俺は声をかけられたことによってどもり気味だ。

「それだったら、やかんに麦茶作ってあるからそれ飲んだら？」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「あと、寝る前にはちゃんとお風呂入ってね」

「え？ああ、そういえばまだ入ってなかったな」

「ちょっと、しっかりしてね。じゃあ、私はもう寝るから。おやすみ」

「おう、おやすみ」

咲は眠そうに目をこすりながら自室へ戻っていく。

コップに注いだ麦茶を一気に飲み干した俺は着替えを持って、浴室に向かう。

その瞬間、体全体に衝撃が走る。体を震わせるような強い邪気。もし、普通の人間がこの邪気を感じ取ったなら、体中が震えて、立っているのがやっとだろう。

久しぶりの感覚だ。これは・・・・魂霊！！

「そろそろ寝過ぎで頭がゆるくなりそうな頃だったんだ。ちっと風呂の前に汗でも流してくるかな」

手に持っていた着替えが床に落ちる。

家を飛び出した俺は一気に音速まで加速して邪気の気配をたどる。

目的地までの距離は３ｋｍくらいだろう。

まあ、音速で移動してるから数秒で着いてしまうのだが。

恐ろしい速さで邪気の中心に近づいていく。

気づけば俺は既に使われなくなった病院の中にいた。

「な、なんでこんな気味悪いとこに現れるんだよ」

正直俺は幽霊とかは大の苦手だ。

そんなので魂霊とまともに戦えるのかという声が出てきそうだが、問題無い。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・あんまり話したくないんだよ！！恥ずかしいから！！

「さ、さ～て、魂霊はどこに隠れているのかな？」

俺は軽く怯えながらも目を閉じて身体中の神経を研ぎ澄ませる。
この建物全体に邪気が充満していて相手の位置が分かりにくい。が、一ヶ所だけ邪気が若干強いところがある。

「そこか！」

叫ぶと同時に炎の矢を放つ。爆発音と共に積まれていた段ボールが炎上する。
しかし、次の瞬間。激しく燃えていた炎が一瞬にして消えた。

「！？」

どういうことだ？炎があんなに早く消えるなんて。

魂霊が煙からその姿を現す。頭が2つあり、片方の頭と前足は獅子。もう一方の頭と胴体から後ろ足にかけては山羊のそれを持ち、竜の尻尾を引きずっている。

「・・・キマイラか。戦うのは初めてだが、さっさと終わらさせてもらうぜ！」

「グワワアアアア！！！」

俺の声に答えるかのように雄たけびを上げたキマイラは獅子の口から炎を吐き出す。
それを高速移動でよけた俺は一気にキマイラの背後に回る。

「風刃」

刃となった無数の風が飛んでいく。風刃がキマイラの身体を切りつけ、深紅の液体が飛沫をあげる。

キマイラが怯んでいる隙にいっきに距離を縮める。そして術式展開。

「炎華！！」

激しく炎の華が咲き乱れる。キマイラの身体がその美しい華に焼かれる。そう思われた。が、炎はみるみるその身体に吸収されていく。

「な！？俺の炎華が吸収された！！」

自分の攻撃が効かないことに驚きを隠せないでいると、二つの頭が口を開けた。次の瞬間には灼熱の火炎が両方の口から吐き出される。どうやら、俺の炎の矢と炎華を吸収した分だけキマイラの炎の威力が増しているようだ。

さっきの炎とは比べ物にならない熱量と圧力を近くで感じた瞬間、俺は炎に飲み込まれていた。

■□■□■

私が部屋の電気を消して寝ようとしたとき、玄関のほうから物音がした。

どうしたのだろう？と私は瞼をこすりながら玄関に向かう。

すると、台所の前に真二のものと思われる着替えが落ちていた。玄

関を見ると、ドアが開けっ放しになっている。

こんな夜中に、しかも下着をその場に捨てて出て行くとしたら理由はひとつしか考えられない。

「また、魂霊が・・・・・？」

魂霊・・・術師・・・・なぜ真二があんな化け物と戦わなきゃいけないのか。

理由なんか初めからわかっている。真二の家が代々術師の家系だから。真二の霊力は並外れているから。

でも・・・・それでも真二に戦ってほしくないと心から思う。それが、私の我侭だということはわかっているのに。

今の私にできることは真二を応援することしかない。

「・・・・・真二、頑張って」

第七話　決着

ズドオオオオン！！

俺はキマイラの炎に焼かれ、吹き飛ばされ、そのまま壁に突っ込み、穴を開ける。

「がはっ！！」

立ち上がろうとすると体中が痛む。なんか、骨が折れてそうな気もする。ギリギリのところで防御系術式の展開ができたから部分的な火傷で済んだものの、まともに受けてたら全身火傷で焼死体と化してるレベルだ。

痛みをこらえ、何とか立ち上がるものの、まともに戦える状態とはいえない。

さっきのダメージで、相当霊力を持ってかれた所為か、霊術も使えるのはあと大技一回程度。

吸収された炎の矢と炎華。通常道理当たった風刃。どうやらキマイラは炎の攻撃を吸収して、自分の力にできるらしい。となれば、手段は一つ。

一撃。この一撃で決めなければ俺の負けだ。

体中の残りの霊力を両手に集中させる。

「集え、冷たく重い、沈静なる水の精霊よ」

俺の右手が青く光りだす。

「集え、速く激しい、狂乱なる風の精霊よ」

やげて、左手も白く光りだす。

「我に集う精霊たちよ。我にその大いなる力を分け与え給え」

俺はよりいっそう光を増した両手をキマイラへと向ける。

「激水爆風槍！！！」

手の前に大きな陣が出現し、風を纏った水が勢いよく放たれる。はじめは形をとらないその水も、その荒れ狂う風によって鋭利になり、より勢いを増す。やがて、渦を巻き始め、竜巻の中を鋭く尖った水が流れる巨大な槍となる。

強大な威力を誇る二つの技によって生まれた衝撃波が病院を襲う。

「うおおおおおおお！！！！！」

「グオオオオオオオ！！！！！」

壁が吹き飛び、屋根が落ちてくる。衝撃波は俺とキマイラをも襲い、両者ともに体中の傷が刻み込まれていく。

やがて、拮抗していた二つの技のバランスが崩れ始める。技の相性もあったのだろう。消火する槍が蒸発させる炎を上回り始める。そうなれば後は速い。勢いに乗った激水爆風槍が炎を蹴散らしながらキマイラへと迫る。

俺は更に霊力をこめる。

「はあああああああああ！！！！！！」

威力を増した激水爆風槍がついにキマイラの体に突き刺さる。更に、竜巻と化した暴風がキマイラの体を抉る。深紅の液体が飛沫を上げ、病院が血の海と化す。

命を絶たれたキマイラはその場にズドォォォォンと音を立て倒れこむ。そして、流れ出た血とともに小さな白い光となって天へと消えていく。

そこには激闘の爪痕こそ残っているが、魂霊の存在は完全に消えていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、やっと・・・・倒せた・・・・か」

霊力をかなり消耗した俺はその場に膝を着いた。

「やべえ、こりゃ帰るのにかなり時間かかりそうだな・・・・」

■□■□■

現在時刻二時半。私はリビングでソファに座っていた。本当は寝てしまうつもりだったのだが、真二が心配で寝つけず、結局真二が帰ってくるのを待つことにしたのである。

「真二、遅いなぁ」

そう思っていると玄関でガチャッという音が聞こえた。

急いで、玄関に向かうとそこには体中傷だらけでボロボロの見ていると痛々しい姿の真二が立っていた。

「真二！？ど、どうしたの！？」

どうしたかなんてことはわかっているのだが、つい聞いてしまう。

「はは、咲。まだ・・・・起きてたのか。ちょっと・・・・霊魂とな・・・・」

「霊魂って・・・・なんでそんなに無茶したのよ！！」

「ちょっとかなり体が・・・・やばそうなんだ。ここに・・・・電話してくんねえか」

そう言って私に電話番号の書かれた一枚の名刺を渡す。

次の瞬間、真二はその場に倒れこんだ。

「ちょ、ちょっと！！真二！？真二！！！！！」

私は無我夢中で渡された名刺に書かれた電話番号に電話をかける。

トゥルルルルルル　トゥルルルルルル

早く出て、早く出て！

すぐに電話に出ないことに焦り不安だけでなく怒りすら感じる。

トゥルルルルルル　トゥルルルルルル

『はい、竹中です』

「大変なんです！真二が！真二が！！」

『落ち着いてください。いったいどうしたんですか？』

「真二が・・魂霊に!!すごい怪我なんです!!助けてください!!」
『・・・わかりました。今行きます。住所は?』
「えっと、○○県××市△△△ー□□□□番地です」
『了解しました。そこにいてくださいね』
「はい」

受話器を置いて息をつく。そして真二の様子を見に玄関へ行くと、急に床に黄緑色に光る魔方陣のような円が現れたと思った次の瞬間、その中から人が現れた。
白衣の下に、ジーパンにワイシャツというラフな格好をした男の人だ。

「え、ええ?ど、どうなってんの??あなたは・・・だ、だれ!?」

第八話　専門医到着

「だ、誰！？はっ！もしかして電話の！？」
「ああ、術師専門医師、仲内秀二（なかうちしゅうじ）だ」
「あ、はい。どうも。ってそうじゃなくて真二は大丈夫なんですか！？」

すると仲内先生はしゃがみ込んで真二に右手を向けた。

「病傷透視」

先生の右手が緑色に輝き、真二の体を包み込む。
やがて光が消え、先生が口を開いた。

「傷がかなり深いな。しかも、霊力をかなり消耗している」

そういって再び右手をかざす。

「治癒加速」

さっきよりも明るく右手が光り輝く。緑色の温かい光。
しばらく光を当て続け、その後に体中に包帯を巻きだした。体中傷だれけというのもあるかもしれないが、包帯を巻き終えると首から下はミイラと何ら変わらない気がする。
もちろん、本物をみたことがあるわけではないが。
・・・なんていうか仲内先生、包帯巻くの下手？

「よし、これで傷は5日もあれば完治するだろう。それまでは、まあ、歩くくらいならできるだろうがそれ以上の運動は避けた方がい

い」
「じゃあ、しばらく安静にしていれば普通に生活できるんですね」
「ああ、早ければ明後日には難なく動けるだろう。でも、霊力はそう簡単には戻らない。少なくても2週間は霊術を使わないように伝えてくれ」
「はい。わかりました。ありがとうございました」
「それでは俺は戻るよ。仕事が山積みだからな。お大事に」

そういうと、先生は足元に魔方陣？みたいなのを発生させ、光の中に飲み込まれていった。

私はその場にペタリと座り込み、息を吐きだす。

「先生、出番短かっゲフンゲフン・・・真二、運ばなきゃ」

私は目の前で気絶している真二を運ぼうとするが、体は普通に大人になっている真二を二階にある部屋まで連れていくのは当然無理だった。かといって、怪我人をソファーに寝かせるわけにもいかない。仕方がないので一階にある自分の部屋に寝かせることにした。床に布団を敷いてそこに寝かせた。私はすぐとなりにあるマイベッドに潜り込む。

「おやすみ、真二」

□■□■□

俺は窓から降り注ぐ太陽の光で目を覚ました。
気持ちいい朝だ。なんだかいい香りもする。ふと、横を見るとなん

と幼馴染みの美少女が気持ちよさそうに眠っていた。

「うお！？咲！！」

俺は素早く飛び退いた。が、それと同時に激痛が身体中に走りその場でうずくまる。

「んん～、しんじ～？」

目を擦りながら起き上がる咲。

「わっ！真二！何で！？」

どうやらビックリしているようだが俺の方が何倍ビックリしたことか・・・

目を覚ましたら今までにないくらいの超至近距離で咲の寝顔が目に飛び込んできたのだから。

そして次の瞬間に身体中に激痛が走るというなんとも痛くも嬉しい目覚めを迎えた俺に咲が慌てて声をかける。

「そ、そうだ！真二、あんまり動いちゃダメだよ！まだ、傷が治ってないんだから」

ああ、そうだ。昨日はキマイラと戦ってなんとかここまで帰って来たんだっけ。そのあとは・・・

「あのあと真二が急に倒れちゃうからビックリしたよ。すぐに先生が来てくれたから良かったけど、そのあと真二を運ぶの大変だったんだから」

俺、あのあとぶっ倒れたのか。そんで仲内さんが治療をしてくれた後、ここに咲が運んできたと。

「咲、なんか、悪いな。迷惑かけて」

咲は真剣な面持ちになって言った。

「それは別にいいんだけどさ。お願いだから無理だけはしないでね。私、真二にまた今回みたいなことがあったらって思うと心配で・・・」

「咲・・・わかった。もう、お前には心配かけねぇよ」

「・・・うん」

しんみりした話が嫌いな俺は話題を変える。というか気になっていることを聞く。

「ところでよ、何でお前は俺の横で寝てたんだ？」

「へ？うーん、何でだろ？たぶんだけど、ベッドから落ちたんじゃないかな？」

「・・・マジか？」

「てへ☆」

・・・こいつは本気で天然への道を突き進んでいるらしい。

「よし、お前はそのまま我が道を突き進め。ゴーイングマイウェイだ！」

「・・・意味わかんないよ、真二」

その後、俺は咲から俺の体について詳しい説明を受けた。

「そんじゃあ、しばらく魂霊狩りはお預けだな」
「うん。仲内先生がしばらくしたら見に来てくれるらしいから」
「わかった。じゃあ俺は部屋に戻ってるから」
「大丈夫？一人で階段上がれる？」
「ああ、それくらいならできるさ」
「ホントに？大丈夫？」
「大丈夫だって。痛みも昨日よりひいてるし」
「じゃあ、朝ごはんできたら呼ぶね」
「おう」

5分後

俺は自分の部屋の床に座っていた。

「よく考えたらこんなに包帯巻いてあったらなんもできねえな」

仲内さん、前から思ってたけど包帯巻くの下手すぎるだろ。
外しても大丈夫だろうか？
とりあえず、痛くないところは外してもいいよな。
俺は痛みの無い右腕と左足、顔に巻いてある包帯を外した。見ると、昨日は確かにあった傷が跡形もなく消えていた。

「すげぇ！もう治ってやがる！」

仲内さん、なかなかやるじゃねぇか。（包帯がうまく巻けないのは

どうかと思うが）これなら5日で治るってのも嘘じゃなさそうだな。

「真二ー、ご飯できたよ～」
「はいよ～」

台所に行くと咲が野菜ジュースを持って待っていた。

「あっ！真二もう包帯そんなに外しちゃっていいの？」
「ああ、見ての通り傷跡ひとつねえ」
「ホントだ！！もう治ってる」
「そんじゃあ、冷めねえうちに飯食おうぜ」
「そうだね」

俺、今思ったんだがこれってなんか夫婦みたいじゃね？
・・・いかんいかん。きっと咲には好きな人いるだろうし、変なことは考えるもんじゃねぇな。

第九話　咲（前編）

数日後、俺の怪我は完全に治った。仲内さんも、もう大丈夫だって言ってくれたし。ただ、霊力の回復はもう少しかかるらしい。なんでも霊力の残量は風前の灯火だったとか。どうりで体が重いわけだ。

今そんな俺が何をしているかというと、全学生の敵、夏休みの宿題と格闘しているのだ！！

咲は俺が宿題をやってる間、晩飯の食材の買い出しにでている。

「うーむ、わからん・・・」

だいたい数学なんかやって何の役にたつと言うのだ。数学なんて簡単な四則演算さえできればいいんだよ。大人になってもルートなんか絶対使わないだろ。

ピンポーン、ピンポーン

その四則演算の応用に苦戦しているとチャイムが鳴った。

「ん、誰だ？」

居留守を使うわけにもいかないので、階段を降り、玄関を開ける。

「どちら様で・・・」

「こんに・・・あれ？中谷？」

「げ、風紀委員長」

「あんたなんで咲の家にいんのよ」

「べ、別に良いだろ。幼馴染みなんだから」

「ま、いいけど。咲は？」
「今夕飯の買い出しにいってるよ」
「そっか。・・・ちょっと家のなかで待っていて良いかな？」
「俺の家じゃないからなんとも言えんな」

咲が聞いたら間違いなくＯＫするだろうが、俺、こいつのこと正直苦手なんだよなぁ。
別に嫌いとかじゃないんだが、この強気な感じが少し苦手なのだ。

「じゃあ、咲に聞いてみるね」

そういって携帯を取り出す？？？

「・・・もしもし、咲？」

咲の携帯にかけているんだから咲が出るに決まってるだろ。
と、どうでもいいようなことを頭の中では考えるが口には決して出さない。

「あのさ、今咲ん家の前にいるんだけど咲が帰るの部屋で待っていても良い？」

こんな用件で電話かける奴は初めて見たぜ。

「・・・うん・・・うん、わかった。じゃあ待ってるねー」

・・・・・・

「じゃあ、そういうことだから。お邪魔しまーす」

仕方が無く、俺は霧島をリビングに通す。

「麦茶でいいか？」
「え？そんなのいいのに」
「まあ、貰っとけ」

俺は手際良く冷たい麦茶を出す。すると、それを不思議そうに見ていた霧島が口を開いた。

「えらく手際がいいのね」
「よく来るからな。自分の家も同然だ」
「そーなんだ」

麦茶をコクリと一口飲むと霧島はこっちを見て口を開いた。

「ところでさ、大谷は咲のことどう思っているの？」
「え？そりゃ、普通の幼馴染みだけど」
「えーと、もっとなんかないの？妹みたいだーとか。」
「さすがに妹は無いだろ。同い年だし。でもまあ、あいつは可愛いし性格も良い奴だからな。俺の自慢の幼馴染みだよ。」
「・・・そっか。咲も大変だな」
「え？なんか言ったか？」
「ううん、なんでも無いよ」
「そうか？ならいいけど」

「・・・・・・」
「・・・・・・」

俺と霧島は黙って麦茶を飲みながら視線を外に向ける。

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

・・・気まずい。
何か話題だ！話題を作らなければ！！
何を話そうかと考えているとき玄関が開く音が聞こえた。

「ただいま～」

どうやら咲が帰ってきたらしい。
ナイス咲！！なんて良いタイミングだ。おまえは女神かなんかか？
と大げさに喜んでみる。

「あ、咲。おかえり。お邪魔してるわよ」
「いいよ別に。ねぇねぇ、小百合。今日うちで晩御飯食べていかない？」
「はぁ！？咲、お前何言って・・・」
「えぇ？そんなの悪いよ」

無視かよ！！

「いいじゃん。どうせ、うちは真二と私の二人しかいないんだから」
「え？・・・大谷と咲の二人だけってどういうこと？」

咲、そういうことは説明が面倒だからあんまり言わないでくれ・・・

「親の都合で俺が咲の家に泊まっているんだよ」
「親の都合って・・・まさか許嫁！？」
「なわけあるか！！だいたい、咲と俺が恋人になるわけねぇだろ。

なあ、咲」
「え？あ、うん・・・そうだね・・・」
咲は少し顔を曇らせて歯切れ悪くそう言った。
「咲？どうかしたのか？」
「ちょっと大谷！！あんたねぇ――」
「いいんだよ小百合」
霧島が俺に怒鳴りつけかけたその瞬間、咲がそれを止めた。
「咲・・・」
「ありがとう。小百合。でも、これは私の問題だから・・・」
俺は咲の調子が悪くなるし、突然怒鳴られるしで全く状況が掴めていなかった。
「えーと、どうなってんの？」
「な、なんでもないよ。私、ちょっと隣のおばさんに用があるから行ってくるね」
と、明らかに作り笑顔だとわかる笑顔で言うと、走って出て行ってしまった。
「あ、おい」
俺はいきなり、咲が飛び出していったことに驚きを隠せなかった。
霧島は咲を追いかけるが、扉の前で振り返ってこう言って走っていった。
「最っ低！！！！」

「・・・なんで？」

蝉の鳴き声が聞こえる中、俺の声が部屋に静かに響いた。

第十話　咲（後編）

私は馬鹿だ。別に真二が私を好きって言ってくれたわけでもないのに勝手に恋人気分で過ごしていた。それでいて、真二にそんな気が無いって知って勝手に傷付いて、逃げ出してきてしまった。
私は何も考えずにただひたすら走っていた

「私は・・・どうすればいいの・・・？」

□■□■□

咲を追いかけるために外に飛び出して見たものの、どっちの方向に行ったのか全然わからない。道を間違えると真逆の方向に行っちゃうし・・・

咲が行きそうな場所を大谷に聞けばいいんだろうけど今さら引き返せないしなぁ。

「しょうがない。片っ端から探してやる！」

・・・とは言ってみたものの北泉市の広さを考えると３０分くらいしたら既に諦めかけていた。

「まったく、どこいったのよ・・・」

■□■□■

咲が飛び出してから数時間。俺はどうせそのうち戻ってくるだろうという甘い考えから部屋で寝ていた。何でも、霊力の回復には何もしないでじっとしているのが良いんだとか。数日間安静に過ごしてきた俺は大谷家のあの修行場所で使える霊力くらいは回復したっぽい。

もちろんこの判断は感覚での話だが。

それにしてももう、６時を回ったのにまだ帰って来ないとは・・・

「やっぱ探しにいった方がいいかなぁ」

■□■□■

気づけば私は暗い路地裏を歩いていた。

「あ、もうこんな時間」

携帯で時間を確認すると、すでに６時半をまわっていた。

「・・・いつまでもウジウジしててもしょうがない！晩ご飯作らなきゃ」

だんだん落ち着いてきた私は空が薄暗くなってきているのに気付き、急いで家に帰ろうとした。

そのとき、周りがどんよりとした空気になると同時に視界が少し暗くなった気がした。そしてケラケラと私を嘲笑うかのような、声がしたと思った次の瞬間、どこからともなく、小さな深緑色をした人の形をしたものが沢山出てきた。
それの手にはゴツゴツとした重そうな棍棒がしっかりと握られている。

「嘘でしょ・・・まさか・・・魂霊!?」

なんで?魂霊の活動は夜中だけじゃないの?なんで私が襲われなきゃならないの?
次々にわからないことばかり頭に浮かんでくる。
あのときと同じように、私はその場に座り込む、というより崩れ落ちる。
そんな私に魂霊だと思わしきそれは手に持っている棍棒を振り上げる。

「ひっ・・・!!」

逃げなきゃ!頭ではそう思っているのに体が金縛りにでもあったように動かない。
駄目だ。殺される!!

「助けてっ、真二!!!!!!」

そう叫んだと同時に目の前のそれが突然、断末魔の叫び声をあげながら、炎に焼かれ、灰と化した。
その次の瞬間、私の体が浮いた。
すぐに誰かに持ち上げられたのだと気付く。・・・しかもお姫様抱っこで。

誰がやっているのか知るべく、上を向くとそこにあったのは真二の顔だった。

「え？真二？」

「もう大丈夫だ、咲」

「え、でもまだあんなに」

そう、いなくなったのは一体だけでまだうじゃうじゃいるのだ。

「あいつらはゴブリンっていって、魂霊の中ではかなりのザコだ。」

「いやいや、そんな解説要らないから早くにげようよ！」

「逃げる？冗談じゃない。咲に手を出そうとした奴にはしっかりと消えてもらうよ」

「だって真二、まだ術は使えな・・・キャッ！！」

そんなことを話しているうちにゴブリンの群が襲い掛かってきた。

対する真二は私を抱き上げたまま、ありえない速さで移動し始めた。

周りが線にしか見えない。

いったい何百キロ出ているのだろうか。

急に止まったと思ったら、すでにゴブリンの大群は激しく燃えていた。

「凄い・・・いつも、こんな感じなの？」

「・・・ああ」

「そう、なんだ・・・」

私はこんなに怖くて恐ろしい相手と毎晩毎晩戦っていたのだと思うと胸が苦しくなった。昔の体験は記憶には残っていたけどそのとき

抱いた感情や迫力というか、そういった感覚的な物を忘れていた。でも、今のことで全て思い出した。あのとき私はどれだけ怖かったことか。

・・・でも、それは真二も同じはずだ。

しばらくの沈黙の末、真二が口を開いた。

「ゴメン、咲が何かに悩んでんのに、何も行動に移せなかった。それでお前を危険な目に会わせちまった。もっと早くお前を探せていればこんなことにならなかったのに」

「・・・いいよ。だって真二は助けに来てくれたじゃない。それだけで十分だよ」

「でも俺はッ！・・・もう、お前を巻き込みたくないんだ・・・」

「いいんだよ。真二は一生懸命戦ってるんだから。それこそボロボロになるまで。それに今回は仕方がないじゃん。・・・普通こんなに早い時間には出ないんでしょ？」

「・・・ああ。ここ1ヶ月くらい魂霊の動きがおかしい。なにもなければ良いんだが・・・」

その後私は真二は悪くないということを家に帰るまで話し続けた結果、誰も悪くないんだという結論に達した。

家に戻って夕飯の準備をしてると、小百合が戻ってきた。小百合は私を見るやいなや、

「咲〜〜！！」

と、私に突っ込んできた。その拍子に手に持っていた菜箸がふっ飛

んだ。
その菜箸は綺麗な弧を描き、テーブルの前に座っていた真二の頭につき刺さった。

「ぐはっ！」
「ご、ゴメーン！！真二、大丈夫！？」

真二が私のことを好きって言ってくれなかったのは残念だけど、私は嬉しかった。
真二が私のことをすごく考えてくれていることがわかったから。

第十一話　恐怖の料理

朝、俺は目覚ましの音に起こされた。夏は日が昇るのが早く、すでに強い日差しが窓から注ぎ込んでいた。

「あー、眠い」

二度寝しても良いのだが、時間ももったいないから起きることにした。

顔を洗い、台所に行くと、咲が朝食の準備をして、出来た料理を霧島が運んでいた。

昨日は咲の勧めで霧島が家に泊まっていったのだ。

「あ、真二。おはよう」

「おはよう。今朝は霧島もなんか作ってくれたのか？」

「・・・」

「？」

「あはは・・・小百合ちゃん、料理できないんだって・・・」

「別にいいでしょ！！まだ修行中なのよ！！だいたい、あんたには関係ないじゃない！！」

霧島は顔を真っ赤にして捲し立てた。

「そ、そうか。まあ、いいけど、修行頑張ってな。じゃあ、食べようぜ」

「そうだね。いただきまーす」

「いただきます」

「いただきます・・・ねえ、大谷」

「ん？なんだ？」

「昨日も思ったんだけどさ、あんたって本当に羨ましい生活してるよね。こんな美味しいご飯毎日食べて、どんだけ幸せなのよ」
「ははは・・・そう、かな。これでも、結構大変なんだけど・・・」
「あんた・・・ちょっと感覚が麻痺してんじゃない？」
「・・・そうかもしれないな」

確かに魂霊退治の仕事が無くなれば俺の生活はかなり幸せな方に分類されるのだろう。
でも、霧島に魂霊の話をするわけにはいかない。

その後、しばらくお喋りをして俺は部屋に戻ってきた。
昨日のゴブリンの行動は明らかにおかしかった。
早い時間帯に現れても自分の力を十分に発揮できずに退治されるだけなのに。

「一応、親父に報告しておくか」

携帯のアドレス帳から親父の番号を探す。

プルプルプル
プルプルプル

『真二か。どうした？』
「昨日、魂霊が妙な動きを見せる出来事があったんだよ」
『・・・何があったんだ？』
「ゴブリンが夜の7時もまわらないうちに現れたんだ」
『何？それは本当か？』
「ああ、咲が襲われた」
『・・・もちろん、無事なんだろうな？』
「当たり前だ。一般人になんか手を出させるものか。咲なら尚更だ

ぜ」
『そうか、ならいいけどな。その件については俺も頭に入れておくとしよう。ところで真二』
「なんだ？」
『お前、ガス欠でぶっ倒れたんだってな』
「な、何故そのことを！？」
『ガハハハ。仲内から聞いたよ。お前がガス欠なんてらしくねえじゃねえか』
「う、うるせえ。しょうがねえだろ。相手はキマイラみたいだったし、炎が全然効かねえんだ」
『キマイラ？珍しいな。キマイラは滅多に出現しないのだが。あれは炎系統中心のお前じゃあ、難しかったかもな』
「ああ。親父はいつ頃帰れそうなんだ？」
『そうだなぁ・・・来週くらいには帰れるだろ。土産もあるから楽しみにしとけよ』
「・・・ああ、期待しないで待ってるよ。じゃあな、親父」
『じゃあな、真二』

「はあ、親父の土産ってろくなもんねえからなぁ」
今までの土産といえば、気味の悪い木の置物とか、道路で拾ったギザ１０とか、この間は肌色成分多めの本を買ってきたっけ。
何しろ親父はろくな土産を買ってきた事がない。
どうせ次もくだらないもの持ってくるんだろうなぁ。
「さて、報告もしたし、さっさと宿題でも片付けるかな」
問題集、ノート、筆記用具を取り出し、机に向かう。しかし、日頃勉強なんて全然やらない俺は３０分もしないうちに睡魔に襲われ、

意識を手放した。
夏の昼間の暑さによって目を覚ました俺のノートはまだ半分も埋まっていなかった。

「・・・昼飯の時間だな」

俺は部屋を出て、台所に向かうと、そこには紫色というか黒っぽいと言うかこんな色って存在するのかっていう色の鼻をつまみたくなるような異臭を放つ液体がお椀に盛られていた。

・・・え？ナゼコウナッタ？

顔をあげると、苦笑いをしている咲と見たことがない謎の液体の入ったお椀をもった霧島がいた。

「まさか、霧島が作ったのか・・・？」
「そ、そうよ。どう、かな」

どうって、これは誰がどう見てもトイレの住人確定コースでしょ。
というかそのレベルじゃ追いつかない気がする。あ

「き、霧島。味見は、したのか？」
「ううん。怖くて出来なかった」
「・・・」

どうやら作った本人はこの禍々しさを認識した上で感想を聞いているようだ。
ならば、答えは１つのみ！！

「死ぬ気で修行することを心よりおすすめします。」

「・・・咲。私に料理教えてくれる？」
「えーっと、その前にこれはどうすれば適切処理できるか聞いていいかな？」
「・・・家に持って帰ります」
「よし、これからナポリタン作るから、真二手伝って」
「お、おう」

そして、俺が麺を茹で、その間に咲が手際よく野菜を切っていった。

「あ、あの。私もなんか手伝・・・」
「「断る」」
「・・・はい」

よくあのこのタイミングで手伝う気になれるな。
そのやる気は素晴らしいんだけどなぁ。
あっという間にできたナポリタンを皆無言で黙々と食べ、霧島は帰っていった。
もちろん謎の液体を持って。

「まさか、霧島の料理があそこまで壊滅的だったとはな」
「そ、そうだね。私もビックリしたよ」
「一体なんでああなったんだ？」
「一緒に料理の練習しようかってことになったんだけど、私がちょっと目を離したら水野色がだんだん赤くなってきて、最後にはあの色になっちゃった」
「・・・ちなみに何を作ろうとしたんだ？」
「味噌汁」
・・・
・・・

・・・

・・・霧島。なんていうか、こう・・・おまえはもう料理をしない方がいいかもしれない。

俺、さっきのコメント間違えたかも・・・。

第十二話　プールにＧＯ

恐怖の料理事件？から約一週間が経過し、夏休みも後半に入った。
ちなみにまだ親父たちは帰ってきていない。
一週間後には帰るんじゃなかったのか？
そんなある日、咲と俺がクーラーのきいたリビングでくつろいでいると、１本の電話がかかってきた。

「あ、俺が出るよ。もしもし」
『もしもし。咲ちゃんと同じクラスの相川ですけど』
「おお、悠樹か。どうした？」
『あれ？その声は真二か？お前ん家に電話してもでないと思ったら咲ちゃんのところにいたのか。ちょうどいいや。お前に話があるんだが。』
「ん、なんだ？」
『明日みんなでプール行かないか？』
「プール？まあ、俺は別に構わないけど、みんなって誰が行くんだ？」
『俺とお前と咲ちゃんと霧島さんかな。咲ちゃんに行けるかどうか聞いてくれる？』
「ああ。咲～悠樹が明日みんなでプール行かないかって言ってんだけど、お前どうする？」
「ん～、いいよ。楽しそうだし」
「咲はＯＫみたいだ」
『よし。じゃあ、明日の１時に市民プールの前な』
「了解」

受話器を置くと、咲が何やらどこかに出かける準備をしだした。

「咲、どっかいくのか？」
「明日プール行くんだったら新しい水着買いに行かなきゃ」
「え？去年のじゃダメなのか？」
「ダーメ。女の子にはいろんな事情があるんだよっ。真二も一緒に行く？」
「・・・いや、俺はいいわ」

女の子の水着選びについていくとか恥ずかし過ぎるわ！！

「まあ、どうせ来ないとは思ったけどね～」

しかも、確信犯かよ！！

「じゃあ、留守番よろしく～」
そう言い残し、楽しそうに出かけていった。

「せいぜい明日の咲の水着に期待するとするか」

□■□■□

そして翌日

待ち合わせの市民プールに、俺と咲は電車で向かった。
一駅だけだが、自転車でいくよりはよっぽど速い。
北泉市の市民プールは、割りと良くできていて普通の２５ｍプールからウォータースライダーまで色んなプールが備わっている。
しかも温水プールだから冬に遊びに来る人たちも少なくない。
まあ、俺は御免願いたいが。

「で？なんでお前はこんなに早くからいるんだ？」

電車の都合上３０分ほど早くついたのだが、そこには既に悠樹がいた。

「いや、えーっと、お、お前は？」

「一時に上手く着く電車が無かっただけだが」

「お前もか。俺もさあ、この時間帯の電車しか無かったんだよねぇ」

「嘘をつくな。お前の家はこの近くじゃねぇか」

「くっ・・・だって楽しみだったんだ。待ちきれなくて・・・」

「お前は小学生か」

「咲ちゃんと霧島さんの水着が」

「黙れ変態」

俺は即座に拳骨をお見舞いした。

そういえば俺も昨日そんなことを考えていた気がするが・・・。

うん、無かったことにしよう。

「それはともかく、あとは小百合ちゃんを待つだけだね」

「あいつの家ってどこらへんなんだ？」

「なんだ、真二。知らないのか？」

「お前は知っているのか？」

「舐めるな。霧島さんの住所は北泉市旧火鳥町〇〇番地だ」

「なぜお前はそんなものを知っているんだ？」

「フッフッフ。入手方法は教えられないが既にクラスの女子全員の住所は入手済みだ」

駄目だ。こいつマジでストーカーになるんじゃないか？

咲なんかどう反応したらかいいか分からずに苦笑いで、退きまくっ

てるぞ

「相川くん・・・」

ついに咲が絶望的な一言を言い放つか。
悠樹、きっとかなり凹むぞ。
なんせ、あの心優しい咲に「気持ち悪いこと言わないで」とか、「やっぱり変態だったんだね」とか言われたらそれなりにショックだからな。

「小百合ちゃんの住所は旧火鳥町じゃなくて旧火鳥町だよ」
「なに？まさか俺が漢字を読み間違えるｎ・・・」
「ちょっと待てぇぇぇ！？」
「え？どうしたの、真二？」
「咲、今のは明らかに突っ込むところがおかしいだろ！」
「なんで？間違いを訂正してあげただけだよ？」

・・・そうだった。
咲が天然だったことすっかり忘れていた。

「あー、もういいわ」
「どうしたんだ真二。なんか変だぞ」
「お前には言われたくねぇっ」

そうこうしているうちに霧島がやってくると、不思議そうな顔をして言った。

「あれ？みんな集まるの早くない？」

□■□■□

霧島が来たらすぐに入場料を払い、更衣室に向かった。

俺と悠樹はさっさと着替えを済ませ、更衣室の前で二人を待った。

「遅いなあ、二人とも」

「まあ、女子なんてそんなもんだろ」

「お待たせ～、二人とも」

「ようやく来・・・」

「おおぉぉ・・・！」

声がする方に振り返るとそこには天使が二人いた。

ちなみに俺たちの反応は上が俺で下が悠樹だ。

霧島は水色のビキニタイプのシンプルな水着だが、霧島本人のスタイルが良いためにかなり綺麗に見える。

一方咲は薄いピンク色の水着で、なんて言うのか知らんけど、スカートみたいなのがくっついているタイプのやつだ。

少し可愛らし過ぎる気もしないでもないが、幼さの残る顔立ちの咲には良く似合っている。

「水着、どうかな」

「霧島さんも咲ちゃんもスゲー似合ってるよ！」

「うん、二人とも良く似合ってる」

「ありがとう、二人とも！」

「んーまあ、その、嬉しいこと、言ってくれるじゃない。アリガト」

霧島はかなり恥ずかしそうだ。

なんせ顔が真っ赤だからな。
咲も若干顔が赤いし、やっぱり恥ずかしいんだろうな。

「おい、真二」
「ん、なんだ？」

悠樹が急に小声で話しかけてきた。

「これは、真面目にナンパ野郎共に気を付けなきゃいかんかもよ」
「まあ、確かにな。二人とも超美少女だからな」
「じゃあお互い気を付けようぜ」
「おう」
「ねえ、なに二人ともこそこそ話してんのよ」
「なんでもねえよ。男同士の秘密だ」
「ふーん」
「そんなことより、まずどのプールから行く？」
「そうだなぁ。まずはやっぱりウォータースライダーでしょ！」

咲の意見により、まずはウォータースライダーに行くことになった。

このときの俺はこのあと何が待ち

第十三話　プールの闘い

みんな遊ぶだけ遊んで、今は少し休憩中だ。
みんな、ベンチに座って、雑談をしている。

「ちょっと、私たちジュース買ってくるね」
「あ、それだったら俺が・・・」
「いいの、いいの。真二と悠樹君はそこに座ってて。すぐ戻ってくるから」

そう言って、咲と霧島は自販機のある方に歩いていった。

「なあ、真二。一応様子見てくるか？」
「そうだな」
「だったら俺に行かせてくれ！」

悠樹がなんか目をキラキラさせながら言ってきた。

「・・・お前なんか企んでるだろ」
「ギクッ！べ、別に霧島さんに良いとこ見せたいとかそういうんじゃないからな！！」
「全部言っちまってるじゃねえか・・・」
「ま、まあ、そういうことだからちょっと行ってくるわ」
「・・・ああ」

まあ、悠樹は喧嘩はわりと強い方だし、なんとかなるだろ。

それから数分後に悠樹が血相変えて戻ってきた。

「真二、や、ヤバい・・・咲ちゃんと霧島さんが・・・・！」
「おい、落ち着け。何があったって言うんだ」
「咲ちゃんと霧島さんが・・・人質にされて、金を出せって・・・・
は、早くなんとかしなきゃ！！」

嘘だろ！？人質！？

「行くぞ、悠樹！！」
「お、おう」

悠樹についていくと、自販機の前に人だかりができていた。

「す、すみません。ちょっと通らせてください」

人混みを掻き分けて、前にでる。
そこには金髪で背中と腕に龍の刺青をいれた男が二人いた。
一人は髪が完全に上を向いていて、スーパーサ〇ヤ人みたいになってる。
もう一人の方は野球部が少し髪を伸ばしたくらいの短めの髪型だ。
二人ともそれぞれ咲と霧島の首に腕を入れ、ナイフを持っている。

おいおい、マジで捕まってるじゃねえか。
どうする？
そんなの助けるに決まっている。
でも、どうやって？

霊術を使えば助けるのは簡単だ。
でも、誰かに見つかるのは不味いし・・・・。

「おい、真二。どうする？」

「んなもん考え中だ」
クソッ、どうすれば二人を救える！？

□■□■□

私たちは自販機でジュースを四本買った。
「さて、戻ろっか」
「そうね」
そのとき、いきなり怒声が聞こえた。
「おらぁぁ！！金を出せぇ！！」
「何あれ？強盗！？」
「わかんないけど、ちょっとヤバくない？」
「早く金出せぇ！！さもないとこの女共がどうなっても知らねえぞ！！」
いきなり背後から怒声が聞こえたとたん、さっきの男の仲間だと思われる奴に腕を掴まれ、ナイフを突きつけられた。
「キャッ！！」
魂霊の次は強盗？
なんで私はこんなに襲われてばっかりなのよーーー！！

□■□■□

しょうがない、今回は霊術を使うか。
・・・そう、しょうがない。
生身で凶器持ってる奴を一発で落とせる自信はないよ。

「おい悠樹。何とかして奴等の気を引け」
「バッ、バカかお前は！？俺を殺す気か！！」
「大丈夫。お前が奴等の気を引いているうちに俺が奴等をやる。それに、うまくいけばお前は人気者になれるぞ」
「・・・仕方あるまい。やってやろう。俺に任せとけ！」

悠樹はそう言うと強盗（？）の前に出ていった。
全くなんてわかりやすい奴なんだ。

「おい、お前たち！！彼女たちを放せ！！」
「悠樹君！？」
「相川！？」
「なんだ？お前は。この女の仲間か？」
「そうだよ。なんか文句あるか！」
「なめた口ききやがって！！お前も人質にしてやる！！」

その間に音速で奴等の後ろに回り込み、その勢いのまま短髪の方をおもいっきり殴り付ける。
もちろん、捕まってる霧島が一緒に吹き飛ばないように体を抑えて。
音速で繰り出された俺の拳は男の顔面にめり込み、男はそのまま吹き飛ぶ。

「ぐぇぇ、がはっ」

野次馬がざわめく。
そりゃあ、いきなり男が吹っ飛んだら驚くだろう。
あれだけやりゃ、顔の骨は十中八九砕けてるだろうな。

「真二！！」

咲は俺のいきなりの登場に驚いている。
霧島は目を見開き、絶句している。
相当びっくりしたんだろう。

殴られた男は完全に意識を失ってその場で気絶している。

「さて、お前もこうなりたくなかったら彼女を返せ！！」
「おい坊主、こっちには凶器があるんだぜ？お前に勝ち目はねえ！！」
「水銃、遠隔射撃・・・」

小声で術を唱え、男の真上に術式を展開する。

「・・・発射」
「ああ？聞こえね・・・うわっ！！」

男の持っているナイフに正確に水の弾丸が勢いよく撃ち込まれる。
水の弾丸に弾かれたナイフが床に落ちる。

「な！？お前何をしたああ！！！！」

男が俺につかみかかってくる。
男が咲を離した瞬間に悠樹が咲を助ける。

「へっ、咲ちゃんは返して貰ったぜ」
「くっ、貴様らっ！！」
「真二、やっちまえ！！」
「おう、くらえ！！」

男の顔面に軽く風を纏わせた回転蹴りからの裏拳のコンビネーションを繰り出す。

「がふっ！、ぶはっ！！」

男はその場に倒れ込み気絶した。
野次馬からは「おお～」だの「いいぞ～兄ちゃん」だの、拍手とともに賞賛の声が上がる。

「咲、霧島、大丈夫か！？」
「うん・・・ありがとう。大谷、相川」

緊張がほぐれたのか、霧島はその場にぺたりと座り込んだ。

「真二、ありがとう、助けてくれて。悠樹君もありがとう」
「いや、二人とも無事でよかったよ。なあ、真二」
「ああ、無事で何よりだ。・・・今日はもう帰ろうか」
「そうだね。さすがにこれから遊ぶ気にはなれないかも・・・」

そうして、俺たちがプールサイドで一息ついていると警察がやってきて、ちょっと事情を聞かせてほしいということで市民プールを出たのはもう日が暮れる頃だった。

「は～今日は疲れたぜ～」
「かっこよかったよ、悠樹君」
「そうか？へへへ」
「ま、大谷の方が全然すごかったけどね」

浮かれてる悠樹に釘を刺す霧島。
少しくらい夢見させてやっても良いだろうに。
まあ俺は純粋に嬉しいから良いんだけど。

「う、うるせ～！それにしても、何だったんだ？あの上から落ちてきた水は」
「さ、さあ？俺にもわからねえよ」
「それにお前異様に強かったしな」
「ま、まあな」

そりゃあ、わからないように霊術使ってたからな。

「じゃあな真二、咲ちゃん。霧島さんも」
「おう、また今度な」
「じゃあね、悠樹君、小百合ちゃん」
「またね」

俺たちは市民プールの前で別れを告げ、それぞれの帰路についた。

第十四話　謎の少女

プールから帰る途中、電車から降りて近所の公園を通りかかるとき、俺たちの前に同い年くらいの女の子が目の前に現れた。
見る人を魅了するような綺麗な緋色の髪。
首のあたりでくくった長い髪は腰のあたりまで伸びている。
意志の強そうな切れ長の瞳の色も、まさに炎がその中で燃えているかのように紅く、これで髪と瞳が黒かったらまさに大和撫子という、まあ、一言で言い表せば容姿端麗な美少女である。

「・・・あの子、こっち見てるけど真二の知り合い？」
「いや、少なくても知り合いではないな」

咲の友達かなんかとも思ったがどうも違うらしい。
それにしても紅い髪とはまた珍しい。
染めたにしてはあの髪は綺麗すぎる。
地毛・・・では無いと思うのだが、実際紅い地毛が存在するのかはわからんからな。

「あんたが風雲真二（かざぐもしんじ）・・・見た感じは、たいしたことなさそうね」
「・・・咲、先に戻ってろ」
「え？でも・・・」
「いいから。こいつは霊術関係者だ」
「・・・わかった」

咲は少し驚いたような顔をして、心配そうな顔で家に向かった。

「驚いた？その名で呼ばれるのは久しぶりでしょ？」
「・・・お前は誰だ」

「私は、火嵐楓(ひあらしかえで)。あなたと勝負がしたいの」
「勝負？どういう意味だ」
「私とあなた、どっちが強いかはっきりさせようってこと。異空間の中でなら人目につくこともないし、思いっきりやれるでしょ？」
「なぜ俺と戦おうとする？」
「それはもちろん一緒に戦うかもしれない相手がどんな人なのかが知りたいからよ」
「・・・どうも俺とお前には持っている情報量に大きな差があるようだ。その説明からしてもらえると嬉しいのだが」
「いやよ。だって説明するのめんどくさいし。というか私はあなたと手合わせができればそれで良いんだけど」

ふーむ、どうしたものか。
いきなり手合わせとか言われてもなぁ。

「じゃあ、俺が勝ったらそこんとこ詳しく教えてもらう。それでどうだ」
「いいわよ。じゃあ、私が勝ったら私の手下になってねっ☆」

楓が印を結ぶと目の前の空間が裂け、穴ができる。
まさかどこでも好きなところで異空間を開けるとは・・・
俺にはできねえな。
俺たちは異空間へと通じるその穴に入っていった。

ふと気がつけば俺は森の中の開けた場所で楓と向かい合ってたっていた。

「それじゃ、行くわよ」

無言で俺が構えると、楓は俺に正面から突っ込んできた。
両手の拳から炎が吹き出している。
その拳でいきなり殴りかかってくる。
それを避けようと俺は即座にしゃがむ。
が、それを見越した楓は拳をその場で止め、思いっきり、俺を蹴り上げる。

「ぐわっ」

女のくせになかなか蹴りが重い。
しかも、俺がひるんだのを確認すると、一気に追撃を仕掛けてくる。
回し蹴りから裏拳、正拳へと回転しながら技を繰り出してくる。
もちろん、手足に炎を灯したまま。

俺もやられっぱなしではいられない。
いったん距離をとり、術式を展開する。
複数同時術式展開――

「――炎の矢！！」

俺の前に小さな術式がいくつも展開され、無数の矢が放たれる。

「嘘、一度にこんなに！？」

放たれた矢の数に驚く楓だが、所詮低級霊術。防ぐ方法は山ほどある。

「くっ、火嵐！」

大量の矢が巨大な炎の渦に飲み込まれる。
より一層炎の勢いを増した火嵐が俺を襲う。
俺はとっさに音速移動で楓の後ろに回り込み、炎華を放とうとする。

「きたわね、風雲・・・！」

にやりとを笑った次の瞬間、いきなり楓の脇から刀が突き出る。
その刀は俺の左腕を突き刺し、その刀身を赤く染める。
さらに、その刀身から激しい炎が吹き出す。

「華炎槍波」

燃える刀がより一層激しさを増し、幾本もの槍となって俺を襲う。
そう、その炎は植物の茎のように、何本にも枝分かれしながら伸び、
俺に当たると同時に花を開く。
巨大な炎の衝撃が俺を後方に吹き飛ばす。

「ぐあああ！！くっ、か、刀だと！！？んなもんどっから・・・」

あいつはついさっきまで俺と同じように何も持っていなかったはずだ。
どこにも、刀なんて隠し持っておける場所なんて見あたらない。
それにあの攻撃、結構やばいぞ・・・。

「あれ？これ、知らないの？霊刀っていってこうやって霊術者は指輪や首輪に変形させることができるのよ。私は指輪型にしてるけどね」
「くそっ、そんなの反則だろ・・・。しかたねえ、お前は刀もって

んだ。それなら俺も本気を出させてもらうぞ・・・！！」
「本気？さっきから私に押されっぱなしのあなたが？まあ、これが本気とはさすがに思えないけど、それで私との力の差を埋められると？」
「ああ、やれるさ。行くぞ！！」
俺はさっきと同じく音速で楓の背後に回る。
「それじゃあ、さっきと同じじゃない。芸のない奴ね」
「それはどうかな？」
さっきと同じく脇から後ろに刀を突き出す楓だが、今度は音速移動を解くことなくそのまま空中に飛んで大きめの術式を展開する。
「！？」
「地獄柱（じごくばしら）！！」
５本の極太の炎柱が楓めがけて降り注ぐ。
楓はとっさにそれを回避するが、音速移動を続ける俺は楓の周りを動き回りながら風刃、炎の矢を絶え間なく繰り出す。
「――炎風乱舞（えんぷうらんぶ）」
その名の通り、楓には炎と風の乱れ撃ちのように見えているはずだ。音速で移動する俺が視認できるはずはないから、あらゆる角度から炎と風が突然現れるのだ。
さらに俺は攻撃を続けながら詠唱を始める。
「集え、冷たく重い、沈静なる水の精霊よ」
「え？嘘、待って、これは・・・」

「集え、速く激しい、狂乱なる風の精霊よ」
「くっ、火嵐！！」
楓は火嵐で炎と風をなぎ払い、自分を渦の中心にして炎を盾とする。
「我に集う精霊たちよ。我にその大いなる力を分け与え給え」
詠唱を済ませた俺は両手から巨大な槍を楓に向けて放つ。
「激水爆風槍！！」
風によってコーティングされた鋭くとがった水流は火嵐をいとも簡単に突き破り、楓を吹き飛ばした。
「きゃあああ！！」
周りにある木を一本折って、次の木にぶち当たりようやく止まる。
やべ、ちょっとやり過ぎたかも。いくらか込める霊力は少なかったはずだがあの技はまずかったかなぁ・・・
「おーい大丈夫か～？」
「・・・・」
返事がない。気絶しちまったか？死んではいないと思うが、一応様子見に行くか。
折れかかっている木の下で倒れている楓の肩をもって声をかけようとしたそのとき、楓は突然指輪を刀へと変形させ、斬りかかり、俺の首に当たる直前で止める。
俺の首と刀の間はわずか数ミリ。

「これでお相子ね」

そういって刀を指輪へと戻し、立ち上がった。
次の瞬間、俺と楓は元の世界へと戻っていた。

「今回は引き分け。よって賭けは無効。じゃあね、風雲真二」
「え、ちょっと待てよ！おい！！」

俺の呼びかけに反応することもなく、楓は去っていった。

第十五話　新しい相棒

楓との戦闘後、簡単な回復術で左腕の傷を癒しながら、咲の家へと向かった。

「ただいま～」

「あ、おかえり。真二」

「おかえりなさい。真二」

え？今母さんの声が聞こえたような・・・。

急いで声のする部屋に入ると、台所には咲と母さんが夕飯の準備をしていた。

「か、母さん！？ってことは親父も！？」

振り返ると、リビングに設置されているソファにどっかりと座っていた。

「よお、真二。久方ぶりだなぁ。咲ちゃんと夜の愛を深められたか？」

そう言った瞬間、台所からフォークとスプーンがものすごい勢いで飛んできて、親父の足下に突き刺さった。

「お、おい、母さん。冗談はよしてくれよ・・・」

「冗談を止めるのはあんたでしょ！このエロ亭主！！」

母さんはさらに手に持っていた菜箸を投げつけた。

まるで矢のごとく飛んでくる菜箸は親父の脳天へとクリーンヒット

した。
あの菜箸、よく刺さるな・・・。
咲は顔を赤らめながらも、足が微妙に震えている気がする。
まあ、隣に立っている人があり得ない反応速度でフォークやら菜箸投げてれば怖いわな。

「ぐ、ぐう。ところで真二、火嵐楓ちゃんとは会っらしいな？」
「え？ああ、そうだ！あいつ、今日俺に突っかかってきていきなり戦えとか言われて訳わかんねえよ。あれ？でも、なんで親父がそのこと知ってるんだ？」
「ん？いや、いま咲ちゃんから紅い髪をした同い年くらいの霊術関係者の女の子がお前と話していると聞いてな」
「思ったよりも普通な理由だな。で、アイツは何者なんだよ。戦ってみてわかったけど、なんかすげー強かったぞ？」
「楓ちゃんは火嵐家の長女で、お前と組んで魂霊と戦うことになった娘だ。これからのパートナーだ。戦ってどんな奴か見極めようとしたんだろう」
「な、なんだって！？パートナーってどういうことだよ」
「お前がここんところ魂霊の動きがおかしいと言っただろう。それで、霊術師を増やそうということになってな。そこで火嵐家から一人この土地に送られてきたわけだ」

ふーむ、楓が一緒に戦うって言ってたのはこういうことだったのか。

「まあいいか。人手が多いに越したことはないし」

俺は今回は初対面で警戒していたにしても楓がもう少し愛想がいい女の子だったらいいなぁなんてことを考えていた。

■□■□■

いきなり決闘を申し込むのはどうかと思ったけど、やって良かったかも。
いきなり、北泉市に増援として行ってこいって言われてびっくりしたけど、何とかなりそうだ。
それにしても風雲真二・・・凄く強かったな。
初めはこんな弱い奴に魂霊退治が勤まるのかと思ったけどめちゃくちゃ強かった。
だって、あの炎の矢。
普通なら同時に出すのは１０本くらいが限度ってもんなのに、あいつは５０本は同時に出していた。
さらに、通常音速での移動は途切れ途切れに使うものなのに、あの持続力。
そして、複数の別の術を高速で打ち付けてくるし。
おまけにあんな大技を間髪入れずに使うなんて普通の術者どころか本山の術者にも早々真似できる技でない。
おそらく、彼は膨大な霊力を持っているのだろう。
じゃなければあの攻撃はあり得ない。
膨大な霊力を持っているが故に霊力がつきることを気にせずに思う存分に霊術を展開できるってことか・・・。

「風雲真二、恐るべしってね」

私はこの土地に来るに当たって借りているアパートへの帰路に就いた。

■□■□■

「あ、そうだ。お前に土産があるぞ」
「今回は何買ってきたんだ？どうせろくな物じゃないんだろ？」
親父は得意げな顔で、壁に立てかけてあった長細い木箱を俺に手渡した。

「・・・これは？」
「まあ、開けてみろ」

言われるままに木箱を開けると、そこにはなんと日本刀が綺麗に収まっていた。

「って、銃刀法違反じゃねえか！エロ親父！！」
「エロは関係ないだろ！エロは！！」
「で、どうしたんだよ。この刀」
「うむ、真二にもそろそろ霊刀が必要な時期かと思ってな」

霊刀？霊刀って・・・あの、突然刀になるあれか！？

「どうやら、楓ちゃんが使っているのをみたようだな」
「ああ、あれどうなってんだ？いきなり指輪から刀に変形するしよ」

あれは変形と言うよりは、突然変異って感じだよな。
生き物じゃないけど。

「これは霊力を流し込むと刀となり、それを止めると指輪あるいは腕輪に戻るという術者のみが使える霊刀だ。今はまだ刀を鍛えたときの霊力が残っているから刀のままだが、お前が触れればお前が霊力を吸い取って指輪か腕輪に戻る」

「なるほどな。じゃあ、さっそく」

俺が霊刀の柄をつかむと霊刀は一瞬で腕輪となり、俺の右手首に収まった。

それには白い石が埋め込まれており、その他の表面は黒く塗られている。

「よろしくな、相棒」

おれは右腕の腕輪を見てそう呟いた。

第十六話　初めての共同作業

８月３１日。
長いようであっという間だった夏休みが幕を閉じようとしていた。
今、俺が何をしているかというと、ずばり夏休みの宿題だ。
毎日少しずつ進めてきたものの、どうやらやる量が少なすぎたらしい。
まだ半分以上残っている。

「く、くそ。わからねぇ・・・・これはどの公式だ？」

俺が自室で四苦八苦している間、さっさと宿題を終わらせていた咲は友達とショッピングだというじゃないか！！

「は～、俺も遊びて～」

咲の両親は俺の親父たちが帰ってきた次の日に帰ってきたので、俺はお役ご免。
我が家へと戻ってきたのだ。
嫌々ながらも、残った宿題を片付けていく。
今夜はマジで徹夜かもな・・・
まあ、魂霊退治で毎日徹夜しているようなものだが。

ふと気がつくと、外は暗くなっており、机にはよだれが垂れていた。
つまり、どういうことかというと・・・

「あぁぁぁ！！！寝ちまったぁぁ！！！！！」

嘘だろ！？まだ全然進んでねえじゃねえか！！
現在時刻ＰＭ７：００。
俺が最後に時計を見たのは４時くらいだったから、３時間ほどぐっすりと寝てしまったようだ。

いやしかし、よだれがプリントにかかっていなくてよかった～
ってそうじゃなくて、どうしよう！
これはかなりのピンチだ。

「真二～晩ご飯出来たから降りてきなさ～い」

腹が減っては戦は出来ぬ。
うん、とりあえず飯を食ってきてから考えよう。

俺は部屋を出て、台所へと向かった。

そして夕飯を食べ、とりあえず咲に宿題を見せてもらうことにした。
さすがにもう買い物から帰ってきてるだろ。
てな訳で咲に電話をかけてみる。

トゥルルルル　トゥルルルル

『・・・真二？どうしたの？』
「宿題を見せてください。お願いします」
『サボってばっかりだからそういうことになるんだよ～』
「ぐっ、と、とにかくやばいんだよ。これじゃ絶対に終わらないんだ」
『しょうがないな～。今回は特別だよ』
「ありがとうございます！じゃあ、今から取りに行くから」
『うん』

無事、咲の宿題を借り、自室で咲の宿題の丸写し作業に入る。
もちろん、咲の方が成績が良いのでところどころわざと間違えながら。

カリカリカリ、カリカリカリ

ふと気がつくと、既に１１時を過ぎていた。
「ふ～、もうこんな時間か・・・だが、このペースならあと2，3時間で終わる！」
そのとき、全身に一瞬衝撃が走る。
――魂霊！！
俺はすぐに家を飛び出し、邪気の気配をたどる。
目的地にたどり着くと、巨大な怪蛇が存在していた。

太い胴体から、二回りほど細い首が９本ものびている。

「これは・・・ヒュドラか？」

キマイラといい、ヒュドラといい、戦ったことのない奴ばっか出てきやがって。

でもまあ、とりあえず・・・

「倒す！！」

俺は一気に急接近する。そして、

「炎の矢！」

無数の矢がヒュドラの胴体に刺さる。

が、傷ついた身体はみるみるうちに再生されていく。

「くそっ、なんて回復力だ・・・」

だったら、頭を狙う！

を切り落とせば回復もできねえだろ！！

「荒れ狂う風！！！」

無数の刃を持った嵐がヒュドラを襲う。

次々と身体が切り裂かれ、３本の首が切り落とされる。

しかし、それをものともせずに回復を始める。

ボコボコと細胞が急速に生成されていく。

首を切り落とされ、６本となっていたヒュドラの首は切り落とされたところから２本ずつ生えて、１２本となった。

「う、嘘だろ！？切断された数の倍になって回復されるなんて・・・！！」

ヒュドラは完全に俺を敵と判断し、襲いかかってくる。
１２個の口から氷の塊が飛び出す。
俺の身長ほどもある氷の塊が俺を囲み、逃げ道を塞ぐ。
そして、俺を食らわんというがごとく大きな口を開けたヒュドラが俺めがけて突進してくる。

やばい！氷を溶かしてる時間もないし、絶対に逃げられない！！
くっ！！

ヒュドラが俺に噛み付くその瞬間。
噛み付こうとしていたヒュドラの頭が横から発せられた極太の火炎によって消し飛ぶ。
とっさにその方向を見るとそこには火嵐楓が立っていた。

「風雲真二！油断してんじゃないわよ！！」
「お、お前は・・・火嵐楓！？もしかして助けてくれたのか！？」
「・・・そ、そんなことはどうでも良いから、早く奴を倒すわよ」
「あ、ああ」

俺は炎を使って周りの氷を突破して、火嵐楓のところに向かう。
首が消し飛んだところには既に新しい２本の首が生えている。

「あいつ、どこを攻撃してもすぐ回復するから全然効かないぞ」
「確かに、あの再生力はちょっと厄介ね」
「アイツを完全に焼き尽くすのはさすがに一人じゃ無理だろうしなぁ」

「・・・それで行くわよ」
「へ？」
「あれの身体を完全に焼き尽くす。あなたならできるわ」
「いやいや、さすがにあんなでかい蛇を完全に焼き尽くすのは無理だから」

いくら霊力があるとはいえ、ビル並みの高さを持つ蛇を完全に焼き尽くすのは不可能だ。

「ううん、できるよ。その腕輪、霊刀をもらったのね」
「あ、ああ」
「霊刀を使えば、霊力を増幅させることができるのよ」
「そ、そうなのか？」

知らなかった。
ていうかあの親父俺に霊刀の使い方何にも教えてくれなかったじゃねえか。

「で、それはどうやるんだ？」
「刀に霊力を込めて、あとはそれを術として放出するだけ。基本敵には普通の霊術と一緒よ」
「なるほどな。よし、やってやるぜ！」

俺は腕輪に霊力を流し、日本刀の形状へと変形させる。
さらに、霊力を霊刀に流し込み、必殺の一撃に備える。

「私も一緒に行くわ。準備は良い？」
「ああ、いつでも良いぜ」
「行くわよ！」「行くぜ！」

俺たちはヒュドラに向かって駆ける。
ヒュドラが氷の塊を撃ち込んでくるが、炎を纏った霊刀で切り捨てながら、さらに接近する。
霊刀はさらに霊力を吸収し、巨大な炎の刀と化す。

「「二重灼熱斬り！！！」」

俺と火嵐楓は思いっきりヒュドラを斬りつける。
そこから炎がどんどん燃え広がり、あっという間にヒュドラの全身を包み込んだ。
そして、俺たちの炎はヒュドラを完全に焼き尽くし、勝利を掴むことに成功した。

「はあ、はあ、何とか倒せたな」
「まったく、あんなのが出現するなんて聞いてないわよ・・・」
「まあ、気にすんなって。これからも一緒に倒していけばいいだろ？」
「・・・そうね」
「・・・えーと、火嵐、さん」
「楓で良いわ」
「じゃあ、俺のことも真二でいいよ。よろしくな、楓」
「よろしくね。真二君」
「そういえばさ。お前すげーフレンドリーな感じになったよな」
「い、良いの！あのときはちょっと緊張してただけ！」

火嵐楓。
俺の新しい仲間になった紅い髪の女の子。
俺は新しい仲間ができたことがとても嬉しかった。

ふと、腕時計を見ると、既に2時を切っていた

「ああ！！まだ、宿題終わってねぇぇぇぇぇぇ！！！」

□■□■□

翌日。
結局徹夜することになった俺は朝の5時に宿題を終わらせ、眠気眼でホームルームに出席していた。

「え～今日は転校生を紹介するぞ～」

ザワザワザワ、ザワザワザワ

みんなが一斉に近くの席の人と話し始める。

「じゃあ、入ってきなさい」

担任の指示に従って、教室に入ってきた転校生は、長くて綺麗な黒い髪を首のあたりでくくっていて、意志の強そうな切れ長の目をした女の子だった。
どこかで見たことのあるその顔は、まさに大和撫子と言うのにふさわしい顔立ちである。

ってアイツ・・・楓！？

俺はあまりの驚きに開いた口がふさがらない。

「私は伊藤楓（いとうかえで）です。みなさん、これからよろしくお願いします」

その日、俺のクラスに火嵐改め、伊藤楓が転校してきた。

第十七話　二学期スタート

その日、俺のクラスに火嵐改め、伊藤楓が転校してきた。

これは偶然か？

まさか、楓が俺と同じクラスだなんて・・・

ふと咲を見ると、なんというかこう・・・、一言で言えば驚いている。

もっと具体的に言うならば、俺に敵意剥き出しだった赤髪の美少女と同じ顔をした黒髪の美少女がそこに立っていることに理解が追い付かないといったところだろう。

そして俺も疑問に思う。

なぜ楓の頭は黒いのだろうか？

昨日の夜の時点ではまだ真っ赤だったのに。

「伊藤。お前の席は一番後ろの窓側だ」

「はい」

担任が指示した席に楓は座る。

「よし、じゃあ連絡からするぞー」

一時限目が終わり、休み時間になると楓の周りには人だかりができていた。

俺はそれを自分の席から眺める。

そこに悠樹が人だかりの中から戻ってきた。

「おい、真二！あの伊藤さんって、めちゃくちゃ可愛いな！！」

「ああ、そうだな」

「それに家は古い由緒ある家柄なんだそうだ」

「ふーん、それにしちゃあ普通な名字だけどな」

「なんだよ真二。興味無さそうだな。やっぱり咲ちゃん一筋だからか？」

「なんでそうなる。俺と咲はただの幼馴染みだよ。」

「はいはい。で？なんでそんなに興味無さげなんだよ？」

「え～っと、それは・・・」

何回か会ったことあるからとはさすがに言えない。

そんなこと言ったら深く追及されるに決まっている。

何て言ったらいいものか・・・

「べ、別に興味がないとか、そういうんじゃなくてだな」

「・・・ほぅ、なるほどな。お前、そういうことか」

悠樹が急に変な顔をして俺をジロジロと見てきた。

「な、なんだよ。気持ち悪いな・・・」

「ズバリ、伊藤さんに一目惚れしたんだろう！！」

人差し指でビシィィィ！！と俺を指差す悠樹。

「・・・」
「・・・」
つい、はぁ？お前頭おかしいんじゃねぇの？
みたいな顔をしてしまった。
「バカかお前は。そんなわけねーだろ」
俺は席をたって、教室を出た。
今日はもうめんどくさいし、授業サボろ・・・
俺はとりあえず屋上へと向かった。

■□■□■

屋上に上り、睡眠不足だったぶん、ぐっすりと眠っていた俺だが、
チャイムの音で目が覚めた。
携帯で時間を確認すると、ちょうど三時限目が終わって昼飯の時間
だった。
「ふわぁぁ。ふぅ、腹へったな」
購買でパンでも買おうか。
と、そのとき、屋上のドアが開いた。
「ん？」

霧島か？とも思ったが、そこに立っていたのは楓だった。
「ようやく見つけた。まさか、2学期早々に授業サボるとは思わなかった」
「昨日は宿題やってて寝てないんだよ。だから寝てたんだ
「そっか」
楓はフェンスにもたれ掛かる俺の隣に来て、そこから見える景色を眺める。
「分かってると思うけど私の名字は伊藤が表名だからね」
「ああ、分かってるよ。俺は大谷だ。風雲なんて呼ぶなよ？」
「大谷ね。わかったわ」
俺たち霊術師は、表名（おもてな）と裏名（うらな）を持っている。
俺だったら、大谷が表名で風雲が裏名。
表名は普段の生活に使う姓で裏名は霊術師の間で使われる姓だ。
昔はその人智を越えた力を狙う者がいたことから霊術師だということを隠す必要があったらしい。
「なあ、楓。聞きたいことがあるんだが」
「ん？何？」
「お前の髪の毛、なんで色が違うんだ？」
楓は何言ってんの？みたいな顔をしている。
え？俺なんか変なこと聞いた？
「あんたもしかしてまだ覚醒してないの？」

「覚醒？」
「はぁ、まさか覚醒も知らないなんて・・・」
楓はため息をついて、説明を始める。
「霊術師にとって、術を使えることが第一段階だとしたら、覚醒は第二段階ってこと」
「そんで？」
「覚醒は自分の霊力を内面に向けることにあるの。そうすることで、身体能力の向上が一番のメリットね」
「それってどんなことができるんだ？」
「そうね・・・・。例えば、動くスピード、動体視力、瞬発力の向上とかかな」
「なるほど。基本的な身体能力が跳ね上がるってことか」
「そう。他にも、1回で3メートルくらいなら普通に跳べるようにもなるし、パンチでコンクリートの壁を窪ませるくらいにはパワーが上がるわ」
「・・・・それは、すごいな」
楓には殴られたくないなぁ。
だって、もし殴られちゃったら肋骨が折れるどころじゃ済まないもんなぁ。

「で、その覚醒は霊力を内側に向けているから身体がそれに反応して髪の色が変わるってわけ。わかった？」
「覚醒状態でも、霊術は普通に使えるのか？」
「ああ、それは全く問題ないわ。霊術は通常時と同じように使えるわ」
「へ～、そいつは便利だなぁ。で、どうやったらできるようになるんだ？」
「まず、自分の身体に流れる霊力の流れを感じることから始めるの。

そうしたら、霊力の流れを掴んで、自分の内側に向けさせる。まあ、後は修行あるのみかな」

霊力の流れか。
意識したことはなかったなぁ。
まあ、とりあえず家に帰ったらやってみるか。

「ところで楓、もう飯は食ったか？」
「ん？まだだけど」
「よし、じゃあ食堂行こうぜ。俺もう腹減ってやばい」
「そうね。私もお腹空いたわ」
俺たちは食堂へと足を進めた。

第十八話　戦友はお嬢様？

俺と楓は食堂で昼飯を食っていた。
俺は日替わり定食を頼んだ。これは割りとボリュームがあって高校生でも十分に満足できる。
一方、楓はカレーセットを頼んだ。
これはカレーの量は少な目だが、サラダと果物がついていることもあって、特に女子に人気だ。

「ここのカレーおいしいっ」
「ああ、ここの食堂にはマジで外れはない。味は生徒全員が保証できる！」

まあ、そのぶん学食にしてはちょっと高めの値段設定なのだが。
しかしそれもせいぜい１００円前後の差だ。

「それは言い過ぎなんじゃない？」
「それもそうか。まあ、十中八九おいしいって答えるよ」

っていうか、不味いって言うやつを見てみたいぞ

「話は変わるけどさ」
「うん？」
「なんで真二はそんなに霊術師のことを知らないの？」
「なんでって・・・親父が教えてくれなかったからだろ」
「でも普通あれくらいのことは幼稚園くらいで教えてもらうものよ？」
「えぇ！？あんなの幼稚園児じゃ理解できないだろ」
「生まれてからずっと霊術師に囲まれてれば自然とわかるものでし

ょ」
「はい？うちには霊術師は母さんと親父と俺の3人しかいねぇぞ」
あとの友達とかはごく普通の一般人だ。
こいつの家は5人姉妹とかで、めちゃくちゃ家族多いのだろうか？
楓を見るとなにやら呆気にとられて、ポカーンとしている。

「あの、楓さん？」
「・・・あ、ゴメン。ちょっと驚いちゃって」
「別に驚くことではないと思うのだが」
「だって私の家には使用人からお父さんの部下まで全員霊術師だから・・・」
「・・・」

次は俺がポカーンとしてしまった。

使用人？部下？なにそれ、おいしいの？

「えーっと、楓ってもしかしてお嬢様的な感じ？」
「霊術師なんて、どの立場にいるかは別として、みんなだいたいそんな環境で育つものよ。ただ私は上級の家柄だからそういう立場なんだけど」

うそ～。うち、めっちゃ一般家庭なんですけど～。

「まあ、こっちに越してきてからはアパートに独り暮らしなんだけどね」
「家事とか自分でできるのか？」
「バカにしないでよ。掃除洗濯料理くらい人並みにできるわ」

意外だ。
使用人なんかいる家で育った子供は何にもできないと思っていた。
これは金持ちに対する認識を改めなければな。

「まあ御六なんてそんなものよ」
「？ごりくってなんだ？」
「あんた、御六も知らないの・・・？」
「だから、俺はそういうのはほとんど知らないんだって」
「はぁ。霊術には炎、水、風、地、雷、治癒の六属性があることくらいは知ってるわよね」
「ああ」
「それぞれの属性を操る大家である六つの家を総称して御六（ごりく）っていうのよ。昔、御六の当主が集められてね。その身体に刻印を受けてからは、刻印が当主の証であり、力の源泉にもなっていたのよ」
「フムフム。ということは、刻印って毎回当主が代わるごとに受けてたのか？」
「うんん。刻印は勝手に代々受け継がれていくものなんだけど、普通には見えないものなのよ。それは、さっき言った覚醒の時に髪の色が変わった者が刻印の継承者で、次期当主ってわけ」
「なるほど。・・・ん、ちょっと待って。覚醒したら誰でも髪の色が変わるんじゃないのか？」
「そんなこと誰が言ったのよ？」
「・・・」

確かにさっきは覚醒の影響によるものだってことしか言ってなかったけどさぁ。
俺の髪もいつか色が変わるのかぁ。
俺、三属性も使えるし何色に変わるんだろう？
とか、楽しみにしてたんだぞ。

楓の顔はどうみても俺がまんまと乗せられたことが嬉しくてしょうがない顔だった。
なんか裏切られた気分・・・・

「・・・楓って意外とからかうのが好きとかそういうタイプ？」
「ごめんごめん。私小さいときにお姉ちゃんに同じようにからかわれたことがあったから、一回言ってみたくて」

・・・・そうですよね。
そんなの知らないのは小さい子供と俺くらいですよね。
はあ、悪気はないんだろうけど何気にショックだ・・・・。
ん？いや待てよ？楓の話が本当だとすると・・・

「楓ってもしかして御六の次期当主！？」
「ええ、そうよ」
「・・・・」

俺、絶句。
え？お嬢様的な感じっていうか完全にお嬢様じゃん。
霊術師の名門中の名門のお家柄で、かつ跡取り娘・・・・。

「敬語で話した方が良いでしょうか？」
「やめて。敬語使い始めたら焼くわよ」

どうやら、敬語で話されるのが嫌みたいだ。
まあ本人がそう言うんだったら今までどおり普通に話すけどね。
・・・うん、焼かれたくない。

「はぁ～、俺は外見は何も変わらないのか・・・・残念」

「ま、まあ、外見は変わらなくても覚醒すれば雰囲気とかもだいぶ変わってくるから。そ、そんなに落ち込まないでよ」
「あ、ああ」

なんか励まされてしまった。
まったく、落ち込ませたのはどこの誰だと思っているんだ。
とりあえず、家に帰ったら覚醒の修行でもしようかな。
つっても何すりゃいいかわかんないけど。
・・・・親父に聞けばいいか。

そうこうしているうちに、俺たちは昼食を食べ終わった。

「さて、教室に戻るか。四時限目は学活か。なにやるんだ？」
「進路についてだって。なんで今日転校してきた私が知っててあんたが知らないのよ」
「そりゃお前、寝てたからに決まってるだろ」
「はあ、そうだったわね・・・」

進路か・・・。
俺は霊術師を一生やっていくつもりだけど、さすがにそれを先生に言うわけにもいかなしなぁ。

俺はそんなことを考えながら教室へと向かった。

第十九話　野郎共の逆鱗

４時限目開始のチャイムと同時に委員長が号令をかける。

「起立、礼」

みんな適当に礼をして席につく。
担任は、原稿用紙を全員に配りながら話し始める。

「えー、今日は進路について話をする。お前たちも来年は受験生だ。そろそろ自分の進路を考えろよ～」

進路ねぇ。
どうせ俺は霊術師を継ぐんだし、受験なんてしなくたっていいんだけどな。
まあ、適当に受かりそうな大学受けるってもんだろ。

「そんな訳で、お前たちに進路を考えるチャンスをやろう」

俺はニヤッとした担任の顔と前からまわってきた3枚の原稿用紙を交互に見る。

・・・まさか・・・・・・

「来週の月曜日までに自分の進路について作文を書いてこい。これは1ヶ月後の三者面談の資料にするから、しっかり書けよ～」
「えー」
「ブーブー」
「やだー」

みんな思い思いに文句を並べる。
が、作文がなくなるわけはなく、担任は進路の説明を始める。
おいおい・・・
さすがに適当にいけそうな大学にいくなんて書けないし、霊術師になることを書くなんて言語道断だ。
このバカ教師め。
なんてメンドクセェことやらせんだ。
どうしたものかと悩んでいるうちに４時限目は終わった。

そして、あれよあれよと時間が過ぎ、放課後。
「なあ悠樹、お前なんて書くよ？」
「え？ああ、作文か。ん～、お前も知ってのとおりテレビ局で働くのが俺の夢だからよ。そっち方面のことを書くよ」
そうだった。
悠樹は中学のときに某動画共有サイト『ＰｏｕＴｕｂｅ』でアニメの神ＭＡＤなるものを見てからずっとテレビ局で番組の編集をすることを夢見ているのだ。
クソッ、こいつじゃ参考にならん。
「わかった。参考にするよ」
「おう！」

次は咲に聞いてみるか。

「なあ咲、作文何書く？」

「作文？うーん、なんて書こうかなぁ。まだ決めてないや」

「そうかぁ。・・・なんかないのか？やりたい仕事とか」

「え！？・・・あ、あえて言うなら・・・そ、その、結婚して、家事とか子育て・・・とかかな・・・」

俯いてても分かるほどに咲の顔が真っ赤になっている。

まあ、確かに結構恥ずかしいよな、その台詞は。

「つまり、主婦として生きたいと」

「えと・・・そういうこと、かな・・・」

「うん、咲ならいいお嫁さんになると思うよ」

「そうかな・・・ありがとう、真二」

夏休み中も家事を完璧にこなしてたし、咲は将来本当にいいお嫁さんになると思うね。

若干天然なところもあるけど、それがまた可愛いからよしとするべきだろう。

だが、結局大して参考にはならなかったな～。

あ、楓はどうするんだろ？

「楓～、ちょっといいか～？」

俺はこの時酷く後悔した。

何故って、今日初めて会ったはずの楓に俺が呼び捨てで話しかけた

のだ。
教室に残っていたクラスメイト（半数以上）の視線が一気に俺に突き刺さる。
やはりみんな驚きを隠せない。

「何、真二？」

そして楓が呼び捨てで返事をしたのがいけなかった。
今までの驚きの視線が一斉に殺意のこもったものに急変する。
特に男子。
目が狩りをする獣のそれになってますよ。

「あのさ、作文なんて書く？」
「作文？ん～、確かに下手なことは書けないわね。まあ、家業を継ぐとか適当なこと書いとくわ」
「あ、その手があったか」

確かに、何も本当のことを書かなくても言い訳だしな。
適当に霊媒師やってますとかでいいか。
あながち間違ってもないだろ。

「サンキュ。参考になったぜ」
「どういたしまして。でもそれくらい自分で思い付きなさいよ」
「うっ、それはほら・・・俺は楓と違ってバカだから」
「それもそうね。2学期早々授業サボって屋上で寝てるよう人は分からないかな」
「ま、まあ、そういうことにしとくよ。じゃあそろそろ俺帰るから、じゃあな」
「うん、また明日ね」

何かとても失礼なことを言われた気がするが、蜂の巣と化した俺の精神力はみんなの視線に耐えきれなくなり、半ば強制的に会話を終わらせる。

俺が荷物を持って楓とすれ違ったとき、楓が小声で囁いた。

「今夜もよろしくね、真二」

「ああ、またあとでな」

一瞬立ち止まって軽く言葉を交わし、俺は廊下に出た。

みんなの視線から逃れた俺はやっと一息。

「ふぅ、軽々しく楓に話しかけたのは誤算だったか」

「その通りだぞ、真二！」

その時、後ろから悠樹の声が聞こえた。

振り返ると、そこには掃除ロッカーのモップやらチョークやら持って怖い顔している男子生徒十数名。

「・・・あ、あのー、みなさんそんな怖い顔して、どうされました・・・？」

「皆の衆、私はこやつには制裁を加えなければならないと思うのだがどうだろう」

なぜかリーダー的立場にたっている悠樹。

そして、みな一様に

「やっちまえー！」

「抜け駆けはゆるさねぇ！」

「楓ちゃんに軽々しく話しかけんな！」

といった感じで叫んでいる。
いつのまに楓はそんなアイドル的存在になったんだ・・・。
「うむ、皆の衆よくぞいってくれた。今こそ奴に制裁を下す時！皆の衆、かかれぇぇぇ！！！」
みんなが悠樹の合図で一斉に俺に襲いかかる。
「ちょ、お前ら、まッ！ウギャァァァァ！！」
俺は男子生徒の逆鱗に触れてしまった・・・・。

第二十話　彼女たちの好奇心

あのあと俺は別の教室に連行され、手を椅子に縛られていた。
俺の前には悠樹とさっきの男子生徒が立っている。
そして始めに悠樹が口を開けた。

「で、真二。お前は伊藤さんとはどういう関係なんだ？」
「話す前に縄をほどいてほしいのだが」
「それは無理な話だ。なぜなら俺たちはなんとしてもお前たちの関係を知らなければならない。お前を逃がす訳にはいかないんだよ」

楓のファンクラブかお前らは。

「だいたいお前は咲ちゃんという美少女がいながら伊藤さんにも手を出すとは何事だ！！」
「そうだー！！」
「この二股野郎！！」
「鬼畜！！」
「変態！！」

次々に罵倒が浴びせられる。

・・・そ、そこまで言わなくてもよくね？

「ま、まあ、落ち着けって。だいたい咲と俺はそんな関係じゃないっていつも言ってるだろ」
「そんなことは関係ない！！真二、お前夏休みの間、咲ちゃんと二人だけで過ごしていたそうじゃないか」
「「「！？」」」

男子生徒がそれを聞いた瞬間、鋭い眼光が一斉に俺を射抜く。
「悠樹・・・なぜ、それを・・・？」
「フ、咲ちゃんと夏休みどうだったかって話してたら教えてくれたよ。お前がどこかに行ってる間にな」
くっ！咲、今回ばかりはお前を恨むぞ！
「あ、あれは親が勝手に決めたことだ。それに咲との間にいかがわしいことは一切無い！！」
「何！？二人きりで何週間も暮らしておいて何も無かっただと！！お前はヘタレか！！チキンか！！」
「どっちでもねぇ！！あと、お前らは俺に咲とくっついて欲しいのか違うのか、どっちだよ」
「む・・・」
お、野郎共が言葉につまったぞ。
チャンス！
「あと、楓は親父の知り合いの娘で何回か会ったことがあって友達ってだけだ。決してお前らが想像しているような関係ではない！！」
「え、そうだったのか？」
野郎共から感じる殺気が少し和らぐ。その瞬間に、風を僅かに操作して俺の手を縛っていた縄を切る。
「じゃ、そういうことだから俺帰るわ」
俺は御丁寧なことに椅子の横に置かれていた荷物を持って、走って

逃げ出した。

「なっ！？ちょっと待て！！」

悠樹がなにやら騒いでいるがスルー。
待てと言われて待つ馬鹿がいるわけ無いだろう。
たとえ追ってきたとしても俺に追い付けるやつは悠樹だけ。
悠樹だけなら説得も可能だ。

結局、悠樹が追いかけてくることもなく、俺は無事に家に着いた。
俺は身軽な格好に着替えて、庭にでる。印を結ぶと空間が裂け、秘密の練習場への道ができる。

「さてと、覚醒とやらをやってやろうじゃないか」

■□■□■

私が真二がクラスの男子たちに連れられていくのを見たあと、荷物をまとめてアパートに帰ろうとしたその時、クラスに残っていた女子が一斉に私の周りに集まってきた。

「な、なに！？」

私が驚いて発した言葉に答えるように、

「大谷くんと伊藤さんって・・・」
「「「どういう関係なの！？！？」」」
一人が言ったあとに声を揃えて迫ってくるクラスメイト（女子）。
「え、えっと・・・ま、前からの知り合いなだけよ」
「知り合いって、どういう経緯で知り合ったの！？」
「えーっと、小学生のときにたまたま――」
「待って！」
適当に言い訳を言おうとした瞬間、ある女の子が口を開けた。
「仮に小学生のときにあなたが真二に会っていたとして私が知らないはずはないわ。幼なじみの私が知らないはずがない」
この子、あのとき真二と一緒にいた子だ・・・。
真二の幼なじみだったのね。
「たとえあなた・・・桜井さんだっけ？幼なじみでも、話したくないことはあるんじゃないかな」
「あの頃の真二が名前で呼びあうような仲の良い友達の話を私だけじゃなく、誰にもしていないとは思えないの」
確かにそれも一理ある。
小学生がそんなに隠し事をするとも思えないわね。
ここは素直に説明した方が得策かな？
「・・・・わかったわよ、全部話すわ」

みんなのキラキラした視線が私に集まる。
あんまり注目されるのは好きじゃないんだけどなぁ。

「真二のお父さんとうちの親が知り合いで、夏休みになってから何度か会ったことがあったの。その時に名前で呼び合おうってことになったのよ。それだけ。なんか質問ある？」
「はいはーい。しつもーん」

一人の女の子が手を挙げる。

「なに？」
「なんで名前で呼び合おうってことになったの？」
「友達なんだから名前で呼びあうようになるのは自然なことじゃないかな？」
「うーん、それもそうか」
「伊藤さん。もう１ついい？」
「いいわよ」

また桜井さんだ。
どうも納得できないらしい。
おずおずと自信なさそうに聞いてくる。

「変な質問で悪いんだけど・・・真二は強かった？」
「ッ！？」

私と真二が闘ったことを知っているの！？
確かにあのときいたけどすぐに帰っちゃったし・・・。
もしかして、霊術師を知っている・・・？

「・・・そうね。まあ、けっこう強いんじゃないかな。男の子だ

し。まあ、これといった理由はないけど」
「そう・・・。ごめんね、変なこと言って」
「誤解を解いてもらえたならそれでいいわ」

それ以上はとくに質問もなく、みんな部活に行くなり、家に帰るなり、教室から出ていった。
・・・・ただ一人を除いて。

「伊藤さん・・・・あなた、霊術師なんでしょう？」
「あなた・・・どこまで知っているの？・・・・

第二十一話　あなたの正体は？

「伊藤楓です」

そう名乗った彼女は、この前真二に突っかかってきた女の人にそっくりだった。
でも、あのときの紅い髪はとても綺麗な色で、とても染めたとは思えない不思議な感じだった。
それが今は真っ黒で私達となんら変わらない。

おじさんの話ではあの人も楓という名前だったはずだから同一人物には違いないと思うんだけどなぁ。

私は疑問を抱えたまま授業を受け、昼休みになった。
真二は一時限目のあとから見かけない。
どうせ屋上かどっかで昼寝でもしてるんだろうなぁ。

「咲ちゃん、飯食おうぜ」
「あれ？悠樹くんは真二と一緒じゃなかったの？」
「おいおい、俺はちゃんと授業受けてたぜ？」
「そうだった？ごめん、気付かなかったよ」

どうも伊藤さんのことが気になって他のことに頭が回らない。

「真二は戻ってくる気配もないし、先に食べちまおうぜ」
「・・・そうだね」

弁当を開き、ご飯を口に運ぶ。
そして咀嚼。

悠樹くんは私に話しかけようとしたのか、口に入れたものをほとんど噛まずに飲み込んだ。その次の瞬間、急に苦しそうに胸の上の辺りを叩き出した。
どうやら喉に詰まらせたらしい。

「だ、大丈夫！？ほ、ほら、お茶！」

とっさに机に置いてあったペットボトルを渡す。
なんとかお茶で食べ物を流し込んだ悠樹は「ふぅ」と息をつく。

「もうっ、ちゃんと噛まなきゃダメだよ！」
「はい・・・。でも、間接キスありがとう」
「え？」

ふと自分が手渡したペットボトルを見ると、それは私が朝買ってきた物だった。

「・・・エッチ」
「なんで！？」

悠樹君は即座に突っ込んできた。

「もう高校生なんだからそれくらい気にするなよ」
「初めに意識してたのはそっちだもん」
「・・・・・すみませんでした」

どうやら観念したらしい。
何に謝っているのかよく分からないけど。

そして食事再開。

「ところで夏休みはどうだった？」
「うーん、始めはちょっと緊張したけど、楽しかったよ」
「緊張？なんで？」
「えーっと・・・」

しまった。
つい口走っちゃった。
真二があんまり人に言いふらすなって言ってたけど、悠樹くんなら別に良いよね。

「真二がずっと私の家に泊まってたから」
「は？高校生にもなってか？」
「なんか真二と私のお母さんたちが４人とも家を空けちゃったから、真二がうちに泊まらされたんだ」
「え、ってことは・・・夏休みの間ずっと2人っきりで過ごしてたってこと！？」
「うん」
「な、なんてことだ・・・」

悠樹くんは頭を抱えてプルプルと震えている。

「真二・・・羨ましすぎるぞぉぉぉぉ！！！！！」
「！！　も、もうっ、あんまり大きな声出さないでよ。びっくりするじゃない。」
「あ、悪い。で、真二とはなんか進展はあったのか？」
「え？・・・別に、何もないけど」

真二が私を大切に思ってくれてることがわかったっていうのはあっ

たけど、魂霊絡みの話だからこの話はやめてほうがいいかな。
「えぇ～？一緒に、しかも二人だけでいたのに何もないとか・・・あいつはヘタレなのか・・・」
「ハハハ・・・」
確かにそろそろ私の気持ちにも気づいて欲しいかも。
「ったく、こんなに可愛い娘に想われているのになんで分からねぇかなぁ。・・・なあ、咲ちゃん」
「・・・自分のことを言われると恥ずかしいかも。・・・・ん？」
さっきまで呆れ顔だった悠樹くんが急に真面目な顔をしてきた。
「俺と付き合ってください」
「ごめんなさい」
なんか告白されてしまった。
もちろん私はそれを断る。
「くっ、即答かよ。冗談とはいえ、けっこう緊張したのに・・・」
「やっぱり冗談だったんだ」
「はあ、お見通しか」
「だって、私と真二の関係を誰より知ってる悠樹くんが本気で言うとは思えないもん。私たちの親友だからね」
「お、嬉しいこと言ってくれるねぇ」
「まあ、少し幻滅したけど・・・」
「やめて～。そんな蔑むような目でみないで～」
私達はそんな風に他愛ない話をしながら昼休みを過ごした。

□■□■□

そして放課後。
真二が男子たちに連れ去られていったあと、教室に残った私達は一斉に伊藤さんの周りに集まった。

「えっ、な、なに！？」
「大谷くんと伊藤さんってどういう関係なの！？」

伊藤さんはみんなに説明し始めたけれど、それが嘘だってことはすぐにわかった。
小学生のときには伊藤さんの話なんか聞いたことないのもそうだけど、何よりこの間の赤髪の伊藤さん（？）は真二と初めて会ったようだったもの。

「待って！」
「仮に小学生のときにあなたが真二に会っていたとして私が知らないはずはないわ。幼なじみの私が知らないはずがない」
「たとえあなた・・・桜井さんだっけ？幼なじみでも、話したくないことはあるんじゃないかな」
「でも、あの頃の真二が名前で呼びあうような仲の良い友達の話を私だけじゃなく、誰にもしていないとは思えないの」

そこまで言うと伊藤さんは諦めた様子で本当のことを話し始めた。
一通り説明が終わったところで、私は質問をした。
彼女が霊術関係者なのかを確かめる質問を。

「変な質問で悪いんだけど・・・真二は強かった？」
真二は赤髪の女の子と戦ったって言ってた。
だったらこの質問に食いついてくるはず。
「ッ！？」
彼女の反応を見る限り、どうやら私の予想は当たっていたらしい。
「・・・・そうね。まあ、けっこう強いんじゃないかな。男の子だし。まあ、これといった理由はないけど」
「そう・・・。ごめんね、変なこと言って」
「誤解を解いてもらえたならそれでいいわ」
そのあと、伊藤さんはいくつか質問に答えてクラスの女子はみんな教室から出て行った。
私と伊藤さんを除いて。
「伊藤さん・・・・あなた、霊術師なんでしょう？」
「あなた・・・どこまで知っているの？・・・・桜井さん」

第二十二話　理解の果てに

教室には私と伊藤さんだけが残った。

「あなた、霊術師なんでしょう？」

「・・・どこまで知っているの？桜井さん」

「真二が霊術師で、魂霊っていう化け物と戦っているってことくらいかな。」

「それは真二から聞いたの？」

「ううん。真二のお父さんから聞いたの」

「どうして・・・」

伊藤さんはとても不思議そうな顔をしている。

「私と真二は初めて魂霊を見たのが同じときだったの。そのときは真二も魂霊の存在を知らなくて、二人で怯えていたの」

「嘘っ！霊術師の家に生まれた子供は物心つくころから霊術師の知識を教え込まれるのものなのに・・・」

「でも、真二はそんなことは全然知らなかった。そのまま私は魂霊に掴みあげられてもうダメかと思ったとき、真二が助けてくれたの」

今思えば、あのときから私は真二のことを好きだと思うようになっただよね。

「助けてくれたって、どうやって？」

「なんだかいきなり白く光だしたと思ったら、一瞬で移動して、魂霊の手が切り落とされたと思ったら、たった数十秒のうちに魂霊が倒されちゃってたかな」

「え！？修行無しで霊術を使って魂霊を倒しちゃったってこと！？」

「たぶん、そういうことだね」
伊藤さんはじっと私を見つめている。

「でも、その後、高熱で倒れちゃってね。その間にあの化け物は何だったのかってことを全部、教えてもらったの」
「・・・それ、いつの話？」
「えーっと小学校3年生くらいだったかな」
「・・・そう、なんだ」

伊藤さんは明らかに動揺している表情。
真二の話が全く信じられないといった風だ。
驚きと焦りが滲み出ている。

「えっと、伊藤さん？」
「あ、ごめんなさい。次は私のことを話さなきゃね」

ハッと表情を一転させ、話を始めた。

「桜井さんの言う通り、私は霊術師よ。でも、普通の霊術師ではないわ。
私は御六っていう霊術師の中の名家の跡継ぎなのよ。あっ、だからって私を特別視はしないでよね。そういうの苦手だから。それで、この地区で霊術師増員の要請があったものだから、修行がてら私が派遣されてきたってわけ」

伊藤さんは自分の動揺を隠すように一気に捲し立てた。

「そ、そうなんだ」
「私と真二の関係は夜、一緒に戦うだけ。あなたから真二を奪うなんてことはしないから、その点は心配しなくて良いわ」

「え・・・なんで私の気持ちを知っているの？」
「そんなのあなたを見てればすぐ分かるわ。それで真二が気付いてないなんて・・・予想以上に鈍感なのね。真二って」
「はははは・・・」
どうやら伊藤さんは別に私の恋敵ってわけではないみたい。
「じゃあ、桜井さん。今日はもう帰りましょうか」
「あ、えっと、その前に・・・」
「まだ何か？」
「私のこと『桜井さん』じゃなくて、『咲』でいいよっ」
伊藤さんはちょっとポカンとしていたけど、すぐに笑顔になって、
「そうね。それじゃあ、私のことも楓って呼んでよね。咲」
「うん！よろしくね、楓ちゃん！」
今の会話だけで本当にお互いにわかり合えたのかな？
分からないけど、名前で呼び合えるくらいには仲良くなれたってことだよね。

□■□■□

異空間の修行場に来てみたのは良いものの、俺は途方に暮れていた。
「覚醒の修行って何すりゃいいの？」
楓は身体の内面に霊力を向けるって言ってたけど、イメージが全く

つかめない。
第一、　今まで霊力を外側に向けてきたっていう感覚自体無いからなあ。
親父も今はいないし・・・・。

「とりあえず、瞑想的なものでもするか」

俺は自分の身長ほどもある大きな石の上に座って、目を瞑った。

集中しろ。
霊力を内側に向けるんだ。
内側に・・・内側に・・・内側に・・・・・・・。

・・・・・・
・・・・・・
・・・・・・
・・・・・・

「ムリだぁぁぁぁぁぁ！！！！」

どうやるんだよこんなの！？
っていうか俺覚醒って見たことなくね？
いやでも、楓は髪が赤くなってたから既に覚醒の力を使ってったってことなのか？
・・・・・・。

「あああああ！！！もう、わからん！！！今日はやめだ！！」

うだうだ考えていてもしょうがないので、覚醒は後回しにした。
親父が帰ってきてから聞いてみればなんとかなるだろ。
そのあとは、いつも通り適当に修行して汗を流した。

家に帰ると既に7時を過ぎていて、リビングのテーブルには2人分の夕飯と1人分の空の皿が置かれていた。

って、え？空の皿？

視線をずらすと、その皿の前には満足げに背もたれにもたれかかって座っている親父がいた。
どうやら、1人で先に夕飯を食べてしまったらしい。

「親父、もう食ったのか？」
「ああ、なんだか無性に腹が減ってな。どうしても我慢できなかったんだよ」
「・・・・」

どうせ、もう夕飯なんだからちょっとくらい待っとけよ・・・・。

「ふわ～。食ったらなんか眠くなってきたし、俺はもう寝るわ。じゃあな、真二」

欠伸をしながら親父がなんかダメな人な発言をしている

「食ってすぐ寝ると牛になるぞ～」
「そんな子供だましを大人に言ったところで意味ないんだよ～」

そういって、親父は自室へと戻っていった。
はあ、全くなんてダメな親父なんだ。
俺はそのまま椅子に座って夕飯を食べ始めた。

しっかし、なんか忘れてるような気がするんだよなあ。
う～ん・・・・なんだっけ？

第二十三話　その力を胸に焼きつけて

私はアパートに帰る途中、ずっと咲の言葉が信じられなかった。
真二が小学校3年生まで霊術師のことを知らなかったなんて・・・。
しかも、感情に任せて霊術を使うだけでなく、魂霊を倒してしまうなんて、そんなことがあるの？
普通じゃない。
本来なら数年の修行を経て、ようやくその頃に使えるようになるもののはず。
私だって2年も修行して初めて使えたっていうのに。
物心ついた頃から霊術師と魂霊の知識を植え付けられ、お父さんに恥じない霊術師になろうと必死に修行をした。
そういえば、あいつ2属性の技を使ってたっけ。
修行無しで2属性の霊術を操る霊術師・・・。
素直にすごいと思う。
でも、それ以上に羨ましい。
真二に対する嫉妬が募る。

「覚醒の方法なんか教えてあげないんだから」

□■□■□

飯の後、俺は珍しく自室で勉強をしていた。
恨めしいことに3日後は整理テストなのだ。
まったく、なんで休み明けにテストなんかやるかねぇ。

「こちとら必死こいて宿題終わらしたってのに」

「真二は私のノートを写しただけでしょう」
「む、俺だって少しくらい自力でやったさ」
「少し、ねぇ」

少しを強調しないでくれ。
悲しくなってくるから。
なんでここに咲がいるかと言うと、俺が無理言って家庭教師を頼んだのだ。
始めは渋っていたが、何度も頼んだら引き受けてくれた。
本人曰く、

「勉強を教えるのは自分の勉強にもなるから」

だそうだ。
まあ、コツコツと勉強するタイプの咲は自分の見直しにもなるのだろう。
俺の場合、見直すほど勉強してないからなぁ。

で、どうやってやっているかというと、咲が出そうな問題に印をつけてくれたから、俺はそれを片っ端から解いていく。
が、事がそんなに上手く運ぶはずもなく・・・

「咲〜、ここがわからないんだが」
「えー？ここは1学期にやったじゃん」
「3ヵ月も前にやったことなんてもう忘れた」
「ここは解と係数の関係を使って――」

ほぼ全ての問題に躓いてる俺。

「・・・こんなのやったっけ？」

「やった！！」

そんなこんなで時間が流れ、１１時くらいに咲は家に帰っていった。
咲のお陰でだいぶ数学が理解できた気がする。

「さて、今日はもう疲れたし寝ｒ・・・っ！！」

身体中に悪寒が走る。

魂霊ッ！！

俺は家を飛び出し、邪気を辿った。

□■□■□

邪気を辿った先には下級、中級の魂霊が群れていた。

「なんだ、雑魚ばっかりか」

ゴブリンから始まり、ワーム、キメラ、名前も知らないやつ、エトセトラ、エトセトラ。が大量に目の前にいる。
こうやって見るとかなりキモいな。

「へー。今日は簡単そうね」
「うわっ。お前いつの間にこんなところに！？」
うしろを振り返ると、楓が立っていた。
今日は髪が黒いままだ。
どうも、戦闘時は毎回紅くなるっていうわけでもないらしい。

「ん？今来たところだけど」
「そんな気配消して登場しないでくれ・・・」
いきなり声かけられたらびっくりするじゃないか。

「さっさとこんな雑魚片付け・・・」
「あぁ！！忘れてた！！」
「なによもう！いきなり大きな声出さないでよ」

さっきの俺の気持ちがわかったか。
なんて、考えているほど俺は落ち着いてない。

「親父に覚醒の修行方法聞くの忘れた・・・」
「ったく、そんなの今はどうだっていいじゃない」
「えー、だって俺くらいの年の奴はみんなできるものなんだろ？」
「また今度教えて貰えばいいでしょう」
「確かにそうだが・・・。あ、そうだ。ちょっと覚醒見せてくれよ」
「えぇ？まあ、別に構わないけど」

そう言って楓は意識を集中させる。
刹那。
楓の放つ気配が一転した。

同時に今まで黒かった楓の髪が紅く染まった。
それはまるで、薔薇が髪に咲き乱れてるかのように美しい。

「じゃあ、本領発揮よ」

そのまま、人外の速さで魂霊目掛けて突っ込む。
「あいつ、あんなに速く動けたのか・・・！」

どうやら音速移動をする俺にはそれを感じることができなかったらしい。
目の前に散らばる魂霊を炎を灯した拳で次々に落としていく。

「散り乱れろ、灼華桜火（しゃっかおうか）！！」

十分に群れに接近してそこで楓は足を止める。
短い詠唱によって楓の前に形成された術式から無数の細かい炎が噴き出す。
細かな炎一つ一つはまさに桜の花弁そのものだった。
１枚の花弁が魂霊に当たると花弁が弾ける。
その爆発の連鎖は止まることを知らず、完膚なきまでに敵を焼き殺す。
魂霊の群れが全滅するその間、僅か十数秒。
俺はただ驚きを隠せないでいた。
こんな大技をあの短い詠唱で済ませる力。
これが覚醒か・・・！！

一瞬で魂霊を片付けた楓はこっちに戻ってきた。

「どうだった？」
「スゲーよ！あれが覚醒の力か！！」

「まあ、まだ本気じゃないけどね。御六の力を使えばもっと色々できるし」
「マジかよ・・・」
俺なんかがかなう相手ではないと思った。
さすが御六の次期当主と言ったところだろうか。

「こりゃあ、俺も頑張らないとなぁ」
「真二だって今でも十分強いじゃない」
「え？そうかな？」

その時ふとキマイラに戦闘不能状態まで追いやられた瞬間が脳裏に蘇った。

「いや、まだまだ駄目だ。こんなんじゃ、まだ・・・」

こんなんじゃまだ、自分の命さえまともに守れない。
強くならなきゃ・・・。
もっと、強く・・・！！

第二十四話　無一文の悲しみ

あれよあれよと3日が過ぎ、テスト当日。

カリカリカリカリカリカリカリ

俺はひたすらテストの問題を解いていた。

すごい！スラスラ解ける！

あ、これは咲が昨日教えてくれたやつだ。

確かこの公式を使って・・・。

もちろん、わからない問題もあるが、いつもより解けている。

数学、国語、世界史、化学と終わり、残すは英語のみ。

咲曰く、

「英語は時間がないから単語と熟語をひたすら覚えるのがいい」

らしい。

というのも、北泉高校では単熟語の知識が必要な問題がかなりウェイトを占めているかららしい。

俺は3日間ひたすら単熟語をやったが、本当にそれだけでできるものなのだろうか？

何はともあれ、やるだけやってみるだけだ。

最後のテストが始まり、問題用紙を見る。

大問1は単語。

自分の覚えた単語を順調に書いていく。

大問２は並び替え。
どうやって解くのかよくわからなかったが、よく見てみると知っている熟語が・・・！
それを元に英文を作っていく。
が、文法上合っているのかかなり怪しい文になってしまった。
大問３、４は長文。
・・・ムリやー。
まず、文が読めねえよ。

そんなこんなでテストは無事終了。
なんかいつもよりかなりできた気がする。
たった３日でこんなにできるもんなのか。

「真二、テストはどうだったよ」
「フッ、バッチリだぜ！！」
「本当か？お前いつも赤点じゃねえか」
「悠樹、今回の俺は少し違うぞ。咲に勉強を教えてもらったからな」
「なっ！？お前それ反則だろ！！」

実は高校入試のときにも咲に手伝ってもらったのだ。

「へへー。これで完璧だｚぐはっ」

悠樹にＶサインをしようとした瞬間、後頭部に衝撃を受けた。
地味に痛い。

「３日勉強してだけで調子に乗らないの」

頭を押さえながら振り返ると腕を組んで右手に教科書持っている咲がいた。

「いま角でぶったろ？」
「うん、真二が調子に乗らないようにしなきゃなぁって思って」
「あの、気持ちは有り難いんだけど、角はやめて。地味に痛いから」
「え、あ、ごめん」

そこで直ぐに謝るあたり、咲らしいよな。
たまに攻撃してくるのが謎だが。
そういえば1学期もなんか踵落としされたなぁ。
しかも寝てるところに。

・・・やっぱり謎だ。

「んじゃあ、テストも終わったことだし、どっか遊びに行こうぜ」
「ん、いいね。どこいこうか」

修行も必要だがテストの終わった日くらい息を抜いたっていいだろ

「駅前のゲーセンでよくね？」
「よっしゃ今日は負けないぜ！」
「フ、俺に勝とうなんて１００年早いぜ」
「２人ともあんまりお金使いすぎないでよ。私お金貸さないからね」
「分かってるって。さっさと行こうぜ」

そんなわけで俺たちはゲーセンへと向かった。
駅前にあるこのゲーセンにはありとあらゆるゲームが取りそろえられている。
メジャーなアクションゲームからよく分からん音ゲーまで完璧だ。

「よし！真二、まずはやっぱあれだろ」

「ああ、まずはあれだな」
俺たちはとある音ゲーの前に立った。
縦横に４つずつ正方形のパネルがあり、曲に合わせて光るパネルをタッチしていくというものだ。
「「ＲＥＡＤＹ　ＧＯ！！」」
ゲームのスタートの合図と同時に音楽が流れ始める。
お互い、冷静に一つ一つのパネルを処理していく。
そしてついにサビ
サビは今までの非じゃない難しさだ。
俺はいつもここで悠樹に差をつけられてしまう。
今日こそはあいつに勝ってみせる！！
アップテンポのサビが流れ始めると、いくつものパネルが同時に光り出す。
「うおぉぉぉぉぉぉ」
複雑に両手を動かし、的確に処理。
処理　処理　処理　処理　処理！　処理！！！　処理！！！！！
「ふぅ・・・。悠樹、お前少し鈍ったんじゃないか？」

「くそっ　まさか真二にあそこで後れをとるとは・・・。ああ！！
もう一回だ真二」
「なんでも受けて立つぜ！」

ふと気付くと、咲が見あたらなかった。

「あれ？咲どこいったんだろ？」
「ん？さっき向こうの方に歩いていったぞ」
「そろそろ俺らも次のゲーム行くか」
「そうだな」

クレーンゲームのコーナーに行くと咲が白い猫のぬいぐるみを取ろうと頑張っていた。
が、どうやら苦戦しているらしい。

「お、頑張ってんな」
「あ、真二。ねえ、これ取れる？」
「うーん。これは難易度高えぞ。どうしても欲しいのか？」
「どうしてもって訳でもないけど・・・欲しい・・・」

顔を少し赤くして言う咲はめちゃくちゃ可愛かった。

「よし、俺が取ってやる」
「ホント！？よろしくね、真二！！」
「あの、俺はお邪魔みたいなんで帰らせていたd・・・」
「「変な気を使わんでいい！！」」

俺と咲が同時に悠樹に突っ込む。

「だってよ～。お前らどっからどうみても仲良いカップルだもん」
「うっ・・・・。そんなことはいいからさっさとこれ取るぞ！！」
「そ、そうだよ悠樹君。それとこれはまた別の話だってっ」

俺たちのゲーセンでの楽しい時間はあっという間に流れていった。
気付けば日も暮れて酔っぱらいのおっさんたちがちらほらと見えるような時間帯だ。

「おっと、もうこんな時間か。そろそろ帰ろうぜ」
「ああ、そうだな」

俺と悠樹は自分の財布を見て「はあ・・・」とため息をついた。
そこには１０円玉と１円玉が数枚あるだけだった。

「これで今月はなんも買えねえな・・・」
「ああ、ホントだな・・・」
「全く、だからあんまり使いすぎないようにって言ったのに」

意気消沈している俺たちを見て咲が呆れ顔で言ってくる。
しょうがないではないか。
悠樹との勝負がなかなかつかないんだから・・・。

そうこうしているうちに悠樹と別れて、俺と咲は自分の家へ戻った。
が、俺はすぐに動きやすい格好に着替え、外に出る。

まずはランニングだ。
最近体力作りしてなかったからな。

たまにはやらないと。

俺は夜道を早いペースで走る。
まだ残暑が厳しいとはいえ9月だ。
夜風が夏より涼しい。
そのせいか気持ちよく走れた。
俺はさらにペースを上げ、２０分くらい走って公園で休憩することにした。
自販機でスポーツドリンクを買おうと思って財布を開くがそこに１００円玉は存在しなかった。

「・・・・はあ」

しょうがないので公園の水道の水をがぶ飲みした。

「ふう。しかし、こうも静かな公園っていうのも少し不気味だよな・・・」

ベンチに腰を下ろし、夜風にあたる。
火照った身体がだんだん冷えていく。
汗で冷え切ってしまわないうちに帰ろうと思って立ち上がったその時、邪気を感じた。
邪気を感じる方を向くと目の前にキマイラとヒュドラの2体が目の前に立っていた。

「おい・・・嘘だろ・・・・・・！！！」

第二十四話　無一文の悲しみ（後書き）

お待たせいたしました。
更新遅くなってすみません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1097z/

Get the Dream

2012年1月1日00時47分発行